

# オーバーロード単発短編集

セパさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オバロ二次創作の中で「書いたはいいけれど、何処に投稿すればいいのか分からない話」を書いては投稿します。

単発の話なので、前後にまったく脈略が御座いません。作品内の時系列についてもバラバラなので、物語の中で解るよう努力いたしますが、不明な場合は申し訳ございません。筆者の力不足です。

※雑作：「滅国の魔女、御身の前に。」——原作14巻後——と重複している話が御座います。原作14巻未読の方はネタバレがあるのでお気を付けください。

以上をご了承の上お読みください。

ご感想をいただけるととても嬉しいです。よろしく願います。

## 目次

生活マジックアイテム	1
ナザリック第9階層の一室で	4
審判の門	8
小悪魔のつがい	12
カルマ値逆転!!	17
ラナーとクライムの休暇前日譚	25
聖王国両脚羊牧場におけるアベリオンシープ嬰兒が、その両親ならびに牧場にとっての重荷となることを防止し、かつ牧場のみならずナザリックに対して有用ならしめんとする方法についての私案	33
あるマジックアイテムの話	37
スパリゾート ラナー様&クライム編	41
皇帝の滑稽劇	44
Bunny Girl の真相	51
オーバーロード★超々小噺集	58
宝物殿での父と子	61
メイドたちの考察	64
御方からのなぞなぞ	67
オーバーロード★超々小噺集 ②	70
正しく間違えるために	72
クライムとラナー様の心理戦 side:ラナー様	74
遺跡の散歩	78
アインズ様のことわざ勉強	80
技術は飛躍的に進歩すれど	83
まーじゃんであそぼう♪	86

エルフメイドの幸せ	88
親子水入らず	92
印璽の値打ち	95
困ったときのカルネ村	98

## 生活マジックアイテム

エ・ランテルの中でも、上から数えられるほど大きな店構えをしている道具屋。とはいえ大層な武器や防具、戦闘用マジックアイテムを扱っている訳ではない。至って普通の生活用品、生活用マジックアイテムを扱う店であり、高名な冒険者や高貴な者たちより、大衆に愛される。そんな店だ。

現在その店主並びに店員・受付嬢に至るまで、全員が緊張の面持ちで直立不動の体勢——意思とは関係なく身体は震えているが——を取り、思考は混迷を極めていた。

とはいえ彼らの怯懦きょうたを笑う者はこの都市に存在すまい。

「ほう……。意図的に薄い鋼を破壊させへ修復リペアで修復された反動を起動装置や力点に利用しているのか。これは……へ水ディストラクション・ウォーター破壊？違うな、より低位の第0位階魔法だが、製品の水による劣化を防ぐもの。それでこつちは燃えない布……なるほど面白い。」

店のあらゆる商品を手にしげしげと観察を行うのは、アインズ・ウール・ゴウン魔導国魔導王陛下その人であり、護衛である天使隊と、御付きとして恐ろしいほど整った顔立ちをしたメイドを連れている。

正直店主としては街を巡回する強大なアンデッドたちを自ら生み出し、神の領域・御伽噺の世界である第八位階以上の魔法を扱えるであろう魔導王陛下が、何故この程度のマジックアイテムに興味を抱いているのか見当もつかない。

確かに魔導王陛下が手に取っているのはそれなりに値が張る富裕層向けの商品であるが、リ・エステーゼ王国が統治していた時分であつても、王家へ献上できるような品物は取り扱っていない。

「ああ、店主。これとこれを1つずつ頂いていこう。チャツカ……点火魔法具の色は……無難に赤としておこうか。」

そう言つて指さしたのは第0位階魔法の宿った回数制限付き点火装置と刻み時計。前者は引き金を引けば爪ほどの火が灯るだけの便利グッズだ。位階魔法を扱える魔法詠唱者マジック・キャスターにとってはむしろ邪魔な

代物であろうし、【2000回着火可能!!】など銘打っているが、別に強大な炎になるわけでもない。刻み時計も時刻を合わせればベルが鳴る至って平凡なものだ。

「フォアイル。既定の料金を支払っておけ。」

「畏まりました。アインズ様。」

「ま、魔導王陛下!!陛下から金銭を受け取るわけにはいきません!」

店主が我慢の限界とばかりに声を張り上げた。その言葉を聞いて魔導王陛下は眼窩を赤黒い炎で揺らめかせ振り向いた。

「料金が足りない?【御用達】の看板や身分の保証でも欲しいのか?残念だが、貴殿の店の商品では我が王城に相応しい品を提供できるとは思えないのでね。」

「いえ、決してそのような……。」

「ならば金銭と商品の公正な取引を以って終わりで問題ないな。興が冷めた、お開きとしよう。」

そう言われればもう何も言えない。店主はただ茫然とメイドから渡された金貨を受け取り、店を出る魔導王陛下の背中に一礼をするほかなかった。



「アインズ様、愚かなわたくしにひとつだけお教えいただいてもよろしいでしょうか?」

店を出て少し、本日のアインズ様当番であるフォアイルが不思議そうにアインズに尋ねる。……とはいえアインズは何を聞かれるか大体想像がついているので、事前に用意していた台詞を発する。

「どうしてあのような店に行ったのか。か?」

当たりのようで、フォアイルは深々と一礼をする。

「二国の王となった以上、民の生活水準を知る……。というのは嘘ではないが表向きの理由だな。技術の進歩とは国の発展のため大切なことであるが、同時に監視をしていなければ暴走する恐ろしいものもある。」

「しかし、人間如き下等種……。」

「ではフォアイルに問うが、この着火装置と同じものをお前は造れるか？」

フォアイルは無言になるほかない。彼女のステータスではそのマジックアイテムに宿った第0位階魔法すら使えないのだから。

「……………意地悪な問いをしたな、すまない。だがこの品は今のナザリックでも造れない……………いや、造れる環境が整っていないと言った方が正解だな。」

フォアイルの顔が驚愕に彩られる。同時に主が手にしている玩具に等しいマジックアイテムなど栄えあるナザリックで作る必要などないことに納得する。

「『弱い魔法だから』 『より強い魔法があるから』 と侮ることが一番危ない。例えば先ほどの店にあった『燃えない布』など、素材を吟味し第0位階〜第一位階魔法を駆使し試行錯誤を重ねた品であるが、今すぐにわたしが同じ様なマジックアイテムを造り出そうとすれば第三位階以上の魔法は必要となる。このような創意工夫は弱者の武器であり、侮った者の末路は語るまでもない。」

「なるほど……………流石はアインズ様です。」

実際、この世界の魔法の使い方はユグドラシルでは考えられない創意工夫や発明の連続であり、ユグドラシルでは見られなかった独自の進化を遂げた魔法もある。刻み時計に使用されている仕組みなど、おそらくアインズの頭ではデミウルゴスあたりに解析を頼み、いつもの方法で説明を求めなければ理解出来ないだろう。

(それにしても買う必要はなかったかなあ。俺はもうモモンじゃないんだし、珍しいから買う癖止めないと……………。コレクターって厄介だよ本当。)

特に使い道のない二つのマジックアイテムを見つめ、アインズはため息の真似事をした。

## ナザリック第九階層の一室で

「いらつしやいませ。セバス様。そして……ツアレ様ですね。」

「予約もなく突然に申し訳ございません。髪のカットとセットをお願いできますでしょうか？ わたくしではなく、彼女です。」

セバスの執事服の袖を掴み、軽く震えているツアレニーニャ・ベイロンは、多分あそこからお湯がでるのだろうか”という器具以外、何がやら解らない機械に囲まれた……それでいながら、まるで神殿を思わせる荘厳な空間に困惑を隠せずにいた。

「えっと……その、せ、セバス様。わたくしのような者がこのような場所を使うなど、とても畏れ多いです。」

「いえ、ツアレ。あなたもナザリックのメイドである以上、自身の身だしなみを万全に整えることは当然の責務です。間違っても伸びた髪を自分で切ろうなど、二度と考えないで下さい。」

柔和であるが、有無を言わさぬ迫力でセバスがツアレに身だしなみの重要性を説く。ツアレは前髪が伸びてきて目にかかりそうになってきたので、ハサミで自分の髪を切ろうとした。

その場面をセバスに見つかり、セバスはまるで娘の自傷行為リストカットを発見した父親のように血相を変え、ツアレをここへ連れてきた。

ここはナザリック第九階層【美容室】

ギルド、アインズ・ウール・ゴウン”の面々がアーコロジーに対抗して造り上げた、絢爛豪華な設備の一つ。ユグドラシルでは意味のない施設であったが、転移にあたり様々な部屋が各々役目を持ちナザリックの一部として稼働している。

そんな中で【美容室】は、ホームクルスメイドや執事などが身だしなみの最終チェックを行う場として重宝されており、【美容室】で店主を任されている切り裂きジャックジャック・ザ・リックパーはそんなメイドたちを通じ様々な情報を得ていた。

中でも、現地の人間がメイドとしてナザリックにやってきた”と

不満を聞いた時は、不敬かもしれないが歓喜の感情を覚えた。当然ナザリックのNPCたちは造物主からの「そうあれかし」と定められた御姿以外に変化する事がまずない。特に常連客であるホムンクルスメイドや執事たちは髪が伸びることもなければ、不必要な髭が生えてくることもない。

そのため美容室で切り裂きジャックが行う仕事は、乱れた髪を櫛で整えたり、ナザリック外に出て汚れたメイドたちの顔や髪を洗う程度。

もちろん大切な仕事であり、ナザリックの一員として手を抜くことなどありえないが、結髪や化粧を施すといった造物主様の定められた仕事の1割も発揮できない状態であった。初めて自分の力を発揮する相手が下等種というのは残念であるが、造物主様より定められた役目を果たせる喜びの方が大きい。

「もちろん大丈夫です。ではこちらが女性用のヘアカタログとなっております。」

ツアレは何冊もの羊皮紙とは違う、ツルツルとした上質な紙で出来た分厚い本を渡される。美しい顔をした人物がモデルとなった様々な髪型が精緻な絵として載っており、まるで塔を捻じったように逆立っていたり、更にはそこに花や宝石を飾ったりなど、何をどうしたら髪の毛がこんな形になるんだ？、という髪型も多数あった。

「個人的なオススメはこちらの『バージョンアップ昇天ペガサ……』」「前髪が目にかからないようカットし、全体も合わせて整えてあげてください。」

「……畏まりました。」

カタログを前に目を白黒させているツアレにセバスが助け舟を出す。こうしてツアレは人生初となる【美容室】を体験することとなる。

椅子に座ったツアレの長い髪を切り裂きジャックが軽く持ち上げる。

(メデイラの多孔質に微量ながら根源的なダメージを確認、繊維束体における水分量・タンパク質・脂質量は年齢水準以下、キューティクルにダメージ傾向。髪質が改善されている時期がナザリックへ来た

時期でしょうか。)

恐らく幼少期から必要摂取量を下回る食事情とストレス過多の環境にあり、この年まで髪の手入れなど一切行っていない事を把握する。

「まず、洗髪の後、ヘッドマッサージから行わせていただきます。」

根源的に回復することは不可能だが、今後生えてくる髪を少しでもマシにすることは出来る。切り裂きジャックはおっかなびっくりとしているツアレの洗髪を行い、ヘッドマッサージを行う。

「んあ……あは……んん……。」

「そうあれかし」と創造された者の極上のヘッドマッサージに、ツアレは顔を紅潮させ漏れ出しそんな艶めかしい声を必死に押さえつける。それを見つめるセバスから射抜くような極寒の視線が飛んできて、仕事に集中している店主は気のせいとばかりに受け流す。

さあ、ここまではナザリックのメイドたちにも行ってきたサービス。ここからが「ナザリックの面々」には行えない、定められた役目を果たすとき。切り裂きジャックは腰のポーチからハサミを取り出し——熱意が強すぎたのか、ツアレには怖がられてしまった——カチャカチャと、何度か素振りをして、髪を前にする。

どの程度の力で、何処の髪から、どの角度で——  
悩むこともなく、瞬時にその解答が脳裏に過っていく。改めて自身の造物主様の偉大さに感銘を受けながら、瞬く間にカットが終わる。本来は客と楽しい雑談を交わす能力も持ち合わせているのだが、初めて自分の能力を活用できる存在を前に、即座に終わらせてしまった。一瞬己を恥じるが……

何もナザリックに属する全員が成長しない訳ではない。階層守護者たるアウラ様やマーレ様など、エルフ族であるため成長が遅く【美容室】を訪れたことはないが、いずれお二人の髪を整えさせていただく誉れにあずかる機会もあるかもしれない。

そういう意味で、今回この人間を実験台に出来たことは非常に有意義だ、【失敗は次に繋がればよい】というアインズ様の御神託が胸にス

トンと落ちる。

散髪後、剃刀で顔を剃り——何故か怖がられて断られたが、産毛処理・肌の老廃物処理・代謝の更新といったメリットを説いた——切り裂きジャックはその出来に満足する。贅沢を言えば化粧やスタイリングの練習もさせてもらいたかったのだが、「メイドとして及第点ならばそれ以上は結構」というセバスの言葉で残念ながら断念することとなった。

それでもセバス様より「流石です。」という賛美を送られたことは素直に喜んでもいいだろう。

事実、ツアレなる下等種を、ナザリックでも及第点と言えるほど美しく変身させることが出来た自信がある。

「では、またのお越しをお待ちしております。」

そういつて自分の作品を連れるセバス様の背中を見送り、切り裂きジャックは首を垂れた。

——その数日後

「あの……すみません。セバス様からお話を聞き、アウラ様の紹介で、その、来ました。」

そこに居たのはメイド服に身を包んだエルフ。不敬にも栄えあるナザリックへ土足で踏み込んだ賊の所有物で、アインズ様の御慈悲で生かされた現地のエルフだ。第六階層でアウラ様やマーレ様に余計なお世話をしていると聞いていたが……。

「いらつしやいませ。本日はどのようなサービスをお望みでしょうか？」

切り裂きジャックは笑顔を浮かべて、季節のサービスである桜茶を提供する。【美容室】とは入店した瞬間からサービスが始まっているのだ。

——これでまた、様々な実験が出来る。

セバス様と恋慕の関係にあったあの下等種と違い、このエルフどもならば様々な実験をしても問題ないだろう。そう思うと、思わず接客用ではない笑みが溢れて仕方がなかった。

## 審判の門

檻樓ゴロに身を包んだ老若男女が、顔色を蒼白にして一列に並んでいる。そのほとんどが、俗世では数多の人間を地獄へ落とし、恐れられ、疎まれ、崇られ、呪われた極悪人たち。

だがその表情からは喜怒哀楽のどれも読み取ることが叶わない。誰も彼も目の焦点さえ定まらず、幽鬼のように歩を進める。

——黄泉へと通じる道は振り向くことも、振り返る事も許されない

三途の川やハデスの門に代表されるような、様々な神話で語られる言い伝えだが、その理由は「絶望」という至極簡単な人間の本质ではないだろうか。

そうして人間の形を保った抜け殻たちは、開かれた審判の門を潜る。

「アインズ様、バハルス帝国より死罪相当の罪人達が送られてまいりました。残念ながらアインズ様のお望みになられていた〈生まれながらの異能〉を持つ者、〈武技〉を扱える者はおらず、突出したクラススキルを有する者もおりません。全員モルモット処遇でよろしいかと。」

「ご苦労。ではわたしが最終判断を行おう。」

「……やはり下等種風情のため、御身の手を煩わせるなど。」

「よい、冤罪者がここで罰せられるという事は、本来罪を犯した者がのうのうと生きているという事だ。属国ぶかに義務を課す以上、宗主国しやうしは与えた義務に応えなければならぬ。無実の者を罰するなど、アインズ・ウール・ゴウンの名が泣こう。」

自分たちはこれから地獄へ堕ちる。

眼窩に赤黒い炎を揺らめかせ、指先に光を灯した目の前の存在は御伽噺や吟遊詩人バイの唄に登場する番人や閻魔と呼ばれる者なのだろうか。神か悪魔か魔王か——どの道、人間の稚拙な想像など届くはずの無い超越者である事だけは確かだ。

「……快樂殺人鬼。有罪だな。ニューロニストには最近罪人を割り振

りすぎた、餓食狐蟲王の巢は足りているか？好きにしてよい。決して無駄遣いはしないように。」

「畏まりました。」

そうして列が進み、自分の番が近づいてくる。だが喚く者も泣く者もない。ただただ、最早一生手にすることはないのであろう儂く淡い人間だった頃の記憶を想起させ、現実から逃避するばかり。

「我が子と妻を殺し、自身も自殺未遂。有罪だ。」

「井戸に毒を入れたと……。有罪。」

「強盗殺人。有罪。」

「連続婦女暴行殺人。有罪。」

…

…

…

次々と列が短くなり、そして最後尾の男が残される。

「ん……。？アルベド、この者の罪状は？」

「はい、怨恨による殺人であると記されております。」

「いや、確かにこの者は人を殺めているが、職務における不慮の事故だ。死罪相当とは言えないな。」

「申し訳ございませんアインズ様！以前冤罪の者が送られて以降、バハルス帝国の法務局ヘナザリックよりエルダーリッチを送らせたのですが、管理体制に不備が……」

「よい、アルベド。間違いは誰にでもある。だからこそこのような時間を作っているのではないか。」

「未だ御身を煩わせる愚かなわたくしに罰を……。」

「構わないと言ったはずだ。罰の必要はない。そしてこの一件で誰かを罰することも禁ずる。」

「……。……。畏まりました。」

「それにしてもこの者の処遇をどうするか。ふむ、アルベドよ。魔導国における……。」

目の前の超越者は何かを深く考えているようであった。

「業務上かちししし……。きやちゆしし、きやち、魔導国の法で対応し

ておけ！記憶はわたしが消しておく！」

自室のベッドで枕を抱え散々奇声を上げ転がりまわったアインズは、ひとまず落ち着きを取り戻して、ぐったりと座っていた。落ち着くまでに【業務上過失致死】を一生分は叫んだ。

「知ってるからって恰好付けるんじゃないやなかつた……。噛んだのを誤魔化そうと焦って更に噛んだ……。」

アンデッドの身体なのに、最初にアルベドの胸を揉んだ時といい、何故変な場面で人間の残滓が出るのだろうか？ アインズは、いよいよ生物学的な命題に現実逃避してしまう。

「いや、待てよ。これは俺が実はみんなが思うほど完璧じゃないって思ってもらおうチャンスなんじゃないか？」

アインズはなんとかポジティブに考えを切り替え、「セリフ集」に言いにくい言葉や早口言葉を付け加え添削し、練習に励んだ。

「守護者統括殿、込み入って相談とはどうされたのですか？」

「……ねえ、デミウルゴス。あなたはアインズ様からのご命令を遵守出来なかつた場合どうする？」

「死を以って償う他ないですが、あの慈悲深きアインズ様はお認めにならないでしょう。改善案を提出の上、アインズ様より贖罪の機会を与えていただけるよう試みます。」

「そうね。では、アインズ様のご勅命に失敗し、更にその結果ナザリツクへ甚大な被害を出した場合は？」

デミウルゴスの表情が一気に引きつる。想像しただけで自分の存在そのものを抹消してしまいたい。それほどのものだった。

同時にアルベドが何を問いたいかを瞬時に理解する。

「アインズ様は魔導国における現状の法整備にご不満をもたれていると。」

「ええ。口に出す事も憚られる様子だったわ。『不敬罪』を死罪にする話もアインズ様が反対され立ち消えたけれど、『業務上過失』についてもナザリック基準を下等種へ適応する事にご納得されていないみたいなの。基準はこの世界にだいぶ譲歩したつもりなのだけだ。」

「アインズ様はお優しいすぎる……。いえ、万という単位で政を見据えている御方です。御慈悲だけではないでしょう。なるほど、そういう事ですか。」

「同じ考えで安心したわ。『糾明』と『究明』の違いね。わたしたちの作った法では、究明が疎かになる。下等種とは身を護るためなら平気で嘘を吐くもの。未知を嫌うアインズ様らしいお考えよ。」

「しかし、それならば法案の承諾時にお教え下さればいいものを……。我々は試されていたのでしようね。」

「そうね。これからまだアインズ様からの課題が無いか、魔導国の法を1から見直すつもりよ。」

「微力ながらお手伝いをさせていただきます。守護者統括殿。またアインズ様の前で答え合わせをしたいものです。」

「その権利は今度こそ譲らないわ。」

二人は偉大なる御方の姿を思い、同時に肩をすくめた。

## 小悪魔のつがい

「殿〜〜！殿〜〜！それがし某の勇猛な姿を見て欲しいでござるー！」

とつとこ……なんて何処からか訴えられそうな擬音を発しながらアインズの元へ駆けて来たのは、アダマンタイトの鎧に身を包んだ忠獣ハムスケだ。正直陶器に入ったはいいが、出られなくなったハムスターにしか見えないのだが、しっかりと危なげない四足歩行で移動している。

「ハムスケか。鎧を着られる様になったのだな。素晴らしいことだ。」  
アインズはキラんとつぶらな瞳を輝かせるハムスケの頭をよよしと撫でる。

「えへへ。それがし某遂にハムスケウオーリアへの道を歩み出したでござる！  
！武技も覚え、鎧も纏えた今、正しく殿を御護りする勇ましき従者にござるー！」

「そうか、それは頼もしい。」

「それで殿！それがし某は何処で命の奪い合いをすればいいでござるか!？」

「ん〜……すまんが、しばらく予定はないな。」

「えええええー！でござるー！」

明るい顔から一転、二回りくらい萎んだかのようなハムスケにアインズはどうしたものかと悩む。適当なシモベを召喚してNVPをさせてもいいが、デスナイトとは戦い飽きているだろうし、図書館からシモベを召喚することも一瞬考えるが、今のハムスケでは太刀打ちできない代物ばかり。

(カルネ村……。いや、あそこにも13体のレッドキャップスがいるな。ハムスケでは敵わん。帝国の闘技場……。だと相手が弱すぎるか。)

ハムスケに丁度いい相手が思い浮かばず、アインズは長考する。

「ああ、そう言えばあの女のペットも似たような望みをしていたな。」

アインズは最近ナザリックへやってきた弱いがレアな戦士を思い出す。元々目的の人物のペットとしか思っていなかったが、この世界独自の〈武技〉だけでなく、彼しか使えないオリジナルの〈武技〉を

有するということで、成長の過程を観察対象にしている。

本来はより危険な実験なども行いたいところだが、仮にも領域守護者のペットなので、無難な鍛錬しか行わせていない。それでもかなりレベルは上げたはずだ。今ならあのガゼフに並ぶ程度には強くなっているかもしれない。

「ちよつと待つている。命の奪い合いは禁ずるが、今のお前にピツタリな相手に心当たりがある。」

「おおー流石殿でござる！ 某の<sup>それがし</sup>〈斬撃〉が炸裂するでござるよ〜。」  
アイنزズは目的の人物を呼び出すため、アルベドヘメツセージを送ろうとしたが、そうなると飼い主に話を通さないといけない。あの二人の関係はかなり歪で倒錯的だ。命ずれば応じるだろうが、ナザリックにおいてアイنزズの言葉はあまりに重すぎる。パワハラまがいな命令はしたくない。

（そう言えばナザリックに来てからのあの二人をよく知らないな。管理者として由々しきことだ。）

そう自省しながら、アイنزズは遠隔視<sup>ミラー・オブ・リモート・ビューイング</sup>の鏡を取り出した。

●  
ナザリック初の現地人領域守護者、異名を「たった一部屋の領域守護者」。

ラナー・テイエル・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフの守護領域にして、居住区画でもある一室。仮にも元大国、リ・エステイーズ王国第三王女のものとは思えない質素な部屋。そこにはベッドと机が一つ、そしていくつかの武具・防具程度しか見当たらない。

それも当然の話で、ナザリックが彼女へ期待しているものは、精神の異形種とも言われるその頭脳であり、与えるものはペンと机で事足りる。なによりラナー自身が既にナザリックへは何も望まない。何故ならば欲しいものは最高の形で手に入ったのだから、あとはただ尽くすだけだ。

その部屋でラナーは「ゲーム理論及びコンテスタビリティ理論を用いたエ・ランテルにおける魔法資源規制の緩和と課題に対する介入」の数式を書き終え、証明と結論に不備が無いか推敲していた。数式に矛盾や論理の飛躍がないか、何度も計算を繰り返す。

上司であるアルベドやデミウルゴスの査読が終わり次第、あの智謀の怪物アインズ・ウール・ゴウンの目に渡る書類である。手を抜けば一瞬で見抜かれてしまうだろう。幸せは手にしただけではダメだ、掴んで離さない握力も持たなければならぬ。しかしその手は聞き覚えのある足音を耳にして止まった。

「ラナー様！ただいま戻りました！」

ラナーは羊皮紙に数式を書く手を止め、パタパタと動きそうになる小悪魔の翼<sup>インプ</sup>を意思の力で抑える。そして背筋にゾクゾクとした快感を覚えながら、「彼の知る自分の笑み」に憂慮の念をブレンドした表情を作り出してゆっくりと振り返った。

「帰ったのね、クライム！心配したのよ。怪我はしていない？大丈夫？」

目の前の、同じく小悪魔<sup>インプ</sup>となった少年……クライムに慈悲に満ちた目を向ける。リ・エステイーズ王国を瓦礫の山に変え、計画通りナザリックへ連れてきたクライムは、約束通りしっかりと魔導王陛下へ忠誠を誓ってくれた。

曇りの無い純粹な、自分だけに向けられる瞳は小悪魔<sup>インプ</sup>になっても変わらない。いや、周りが異形種だらけのナザリックで、ラナーを護ろうという意識が強まったためか、子犬の瞳は更に燦然と輝いて見える。

「はい！ラナー様。本日は魔法の武具を持ったアンデッド7体をこの剣で討ち取ることができました。この身体となり一時期は力の衰えを覚えておりましたが、順調に能力を取り戻しております！ラナー様の剣として今後も精進致します！」

定命の人間から不老の小悪魔<sup>インプ</sup>へ変身したクライムが魔導王陛下へ忠誠を誓う際に申し出た願いは、自分に強くなる機会を与えて欲しいというものだった。

勿論クライムがどれだけ努力しようと、この大墳墓で無限に沸き出すモンスターの役目程度しか果たせないだろうが、誰でもない魔導王が「クライムしか扱うことの出来ない武技」である〈脳力解放〉に強い興味を持ち、定期的に稽古をつける約束を交わした。

ラナーとしては四六時中ともに居てくれるクライムも好きだが、多少危険な旅に出て最終的に自分の元へ戻ってくるクライムも捨てがたい。

（ああ、この瞳。わたしだけを見る純粋な……。褒めたらどうなるかしら？それとも少し拗ねてみようかしら？ああ、愛おしい、気が変になりそう。）

ラナーは今すぐにもペンを放り投げてクライムをベッドに押し倒し、また痙攣・失神するまで愛でてやりたい衝動に駆られる。

即断即決。ラナーは仕事と幸せを天秤クライムに掛け、迷わず後者をとった。

「……クライム。無理はしないで。わたしの為に傷つくクライムを、わたしはどんな気持ちで見たいれば。もしもの事があれば、わたしはひとりぼっちに。」

ラナーは表情を操作し目をうるわせクライムの胸元に飛び込む。恐らく赤面し、自分の心配をしているであろうクライムの表情を見たいが、今は我慢だ。

「怖い、クライム。わたし……わたし……。」  
「ら、ラナー様。」

まるで導かれるようにクライムがラナーを抱擁する。以前の——  
リ・エステイゼルゼ王国王女と従者では考えられなかった行動。

抱きしめられたのはラナーだが、捕らえられたのはクライムの方だ。ラナーの口元が三日月のように吊り上がる。

そして二人は接吻を交わし——



「殿々々？人間の交尾ってオスがメスに食べられるのでござるか？

あ、泡を吹いて失神したでござる。」

「あ、あく。」

アインズはいよいよアウラとマーレへの情操教育を誰に任せようかという命題に現実逃避し、目の前で行われる蹂躪劇を呆然と眺めていた。

## カルマ値逆転!!

ナザリック宝物殿。全10階層からなるナザリック地下大墳墓において、どの階層からも足で赴くことが叶わない場所。その内部はギルド“アインズ・ウール・ゴウン”が溜め込んだ財宝が収められている。天高く積み上げられた燦然と煌めく金貨・宝石・宝剣の山々を保管する第一の部屋。

そこを抜けた先に、談話室があり、アインズはかつての仲間——ひどく簡素なネックレスの形をしている主にナザリックのギミック面を担当していた二人、タブラ・スマラグディナとガーネットの遺したマジック・アイテム——を前にし、眼窩に儂げな光を宿し長考をしていた。

アイテムの効果は第八位階魔法〈ディストーテッド・モラル道徳歪曲〉を基盤として「カルマ値の土を一定時間逆転させる」という代物であり、ユグドラシルではカルマ値——だらけのDQNギルドでならしたナザリック地下大墳墓において、敵を欺くために作成したが今一使いどころが解らないのでボツになっていた品だ。

ただこの世界にナザリックが転移し、NPCが意思を持つようになった現在、カルマ値はユグドラシルとは違う効果を持っている……可能性がある。例えばセバスの反乱未遂と疑われた騒動、例えばユリとニグレドの抵命、例えばニグレドやペストーニャのり・エステイーゼ王国の民への助命。

(ユグドラシルでは装備品やスキルの効果・使用条件・装備条件の指標でしかなかったが、もしNPCの行動指針そのものに関わるのであれば由々しきことだ。)

自分たちに来れることは、敵も来れると考え行動に移すべき。……ギルド・アインズ・ウール・ゴウンの基本方針であり、転移してすぐに慢心し対策をしなかったばかりに、愛しのシャルティアと殺し合いをする羽目になった苦い記憶を忘れてはならない。

敵がナザリックのNPCの情報入手し、何らかの方法でカルマ値の逆転を起こさせ混乱と紊乱を呼び起こした場合、どのような現象が

起こるか想像もつかない。一度は実験をするべきなのだろうが……  
(これ以上、仲間の子供たちを俺が独断で弄んでいいのか？ただでさえ……)

アイنزの脳裏に最終決戦装備裸エプロンで出迎えるアルベドの姿が過る。

とはいえ【未知】を放置する愚を犯す訳にもいかない。【絶対支配者】と【ナザリック地下大墳墓ギルド長】の狭間で悩むアイنزだが、答えは一向に出ない。

(バカの考え休むに似たり……か。)

「パンドラズ・アクターよ。」

「は！なんでしょうか父上！」

これまで至高の創造主の思索を邪魔しまいと静かに座っていたパンドラズ・アクターが弾かれたように立ち上がる。命令なので敬礼こそしていないが、歌劇学生を思わせるポージングにアイنزは少しゲンナリとする。

「これより他言無用の勅命を与える。」

その瞬間パンドラズ・アクターの黒穴が燦然と煌めいたような気がした。アルベドやデミウルゴスを巻き込めばアイنزの手に負えない大ごとになりかねないし、何故こんな重要事項を今まで放置していたのか”に対する言い訳が思いつかない。

それにパンドラズ・アクターはこう見えてアルベドやデミウルゴス並みに頭が回り、忠誠は絶対だ。共犯者としてこれほど最適な者はいないだろう。

いざとなればネックレスを遠隔から外せるよう細工し、パンドラズ・アクターに観察対象の人選を委ね、アイنزは遠隔視ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡を取り出した。



「あ、あ、あの。セバス様？」

猛禽類を思わせる鋭い眼光を宿した鋼の執事、セバス・チャンは失神している魔導国首都エ・ランテルで働く館のメイドや執事たち――

ツアレがメイド主任となっている——を地を這う虫を見るような眼差しで見下していた。

「ツアレ、これはどういうことですか？従者として最低限のマナーがなっていないばかりでなく、指導を行う前に意識を手放すとは……。」

「無理もないだろう」とツアレは思うが口にしない。エ・ランテルにやってきたセバスを執事・メイド総出で迎えたのだが、『接遇が全くなっていない』と穏やかながら怒気を孕んだ一声を発し、そのまま凍てつくような覇気で全員を一瞥し、文字通り睨み倒した。

ツアレとて心臓を氷の手で握られたような錯覚を覚え、ナザリツク内で様々な洗礼を受けていなければ同じように意識を失い倒れていただろう。とはいえツアレは意識こそ保っていたが平常でいられるはずもなく……。

「ツアレ。あなたは誰の許可を得てアインズ様より賜る下着を汚しているのですか？あなたの失態はナザリツクの失態になると最初に教えたはずですが、指導が足りなかったようですね。」

セバスの眼は、ツアレでさえ見たことが無い無機質な代物で、混乱の渦中に叩き落される。そんな中、騒動を聞きつけたエ・ランテルの館で働くエルダーリツチの一体がやってくる。

「セバス様!!一体何があつたのですか!?!」

「ああ。出来損ないのメイドや執事達に指導を行おうとしていたところ。思った以上の欠陥品で失望しておりますがね。」

「申し訳ございません。しかしながら、セバス様とはいえエ・ランテルの従者全員を失神させるのは流石に越権行為であるかと……。」

「もちろん今度こそアインズ様へご報告を行い、わたくしが責任をもって指導を行います。わたくしは湯あみ場へ行きますので、お手数ですがツアレの着替えを持ってきてもらえますか？失神している者たちは……まあ直に目を覚ますでしょう。それまでにお客様がお見えでしたらわたくしが対応いたします。」

そう言つてセバスはツアレを肩から担ぎ、ゆつくりと赤い絨毯を歩き始めた。

「セバス様！自分で！自分で歩きます！」

「黙りなさい。そして落ち着きなさい。その震えた足腰で完璧なメイドの歩みなどできません。」

「しかし……。」

ツアレの脳裏に“恐怖”の二文字が過る。自分が至らないばかりにセバス様を怒らせ恥をかかせ、大事な部下を大変な目に遭わせてしまった。……もちろん理不尽な出来事として疑問に思うべき事象なのだが奴隷であつた期間の長すぎたツアレは自罰的な思考の悪循環に突入し、最悪の事態ばかりが想起されてしまう。

刹那、唇に温かな感触を覚える。

「落ち着くよう言っているのです。これが最後の警告です。」

ツアレは唇の温もりに呆然としながらも、何故か少し戸惑っているセバス様を見て吹き出しそうになる。……今日のセバス様はおかしい。しかし、こんなセバス様も悪くない。

恋は盲目。ツアレにとってセバスは世界の全てだ。そのまま成すがままにセバスに身体を洗われ、体罰を伴う指導方法を学ぶこととなる。

●  
「ラナー様もパンドラ様よりそのアクセサリーを身に付けるよう厳命されたのですか？」

【たった一部屋の領域守護者】ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフの守護領域にして、居住区画でもある一室。クライムはラナー様が自分と同じ、恐らくはリ・エステイーズ王国の秘宝【レイザーエッジ剃刀の刃】など比ではないレベルのマジックアイテムを提げている姿を見て、顔を不快気に歪ませる。

あの魔導王に忠誠を誓ったが、真なる忠誠はラナー様以外に誓っていないし、今後変わる事もないだろう。あの化け物はどれだけ自分たちをモルモット実験動物にすれば気が済むのだろうかど怒りが湧いてくる。

「ええ。クライムも大変ね。今日の訓練はどうだったかしら？」

「本日はリ・エステイーズ王国が存在していた時分、愚かにもラナー様の首を討ち取り助命を乞おうと目論んだという元王国騎士を討つ機会に恵まれました。その愚かさについて身を以て味わって下さったと思います。」

「まあ……。でもあまり酷い事はしないであげて。わたしはこうして生きていますから。」

「はいーラナー様ー！」

「わたしが恐ろしいことは、何よりもクライムを失う事……。恨みを無理に買う必要はないわ。」

「そう……。ですね。頭に血が上っていたようです。以後気をつけます！」

「今日は疲れているみたいですし、先にベッドで休んでいて。わたしはまだ少しだけ仕事があるから。」

「畏まりました。」

従順な犬がベッドへ戻ったのを確認し、ラナーは「クライムの知っている笑み」を崩す。素に戻ったはずであるが、鏡に映るのは「黄金の姫」と呼ばれていた頃の欺瞞していた慈悲に溢れた笑顔。

……ラナーはその頭脳をもって、自分で自分の計算評価アセスメントを行う。最初このアイテムは善悪の価値観を逆転させるものと思っていたが、だんだんと疑惑が募り、クライムの話聞いてそんな単純なものではないと確信をもった。

その証拠に、クライムは恐らく実験で元王国騎士を拷問に掛けた。だが、そこには一縷の罪悪感も覚えていない。本来のクライムならばありえないことだ。

しかしラナーを見つめる子犬の瞳に曇りは無く、行動に変化はみられるものの、価値観そのものに変異は無い。自分を鑑みてもそうだ。

王国騎士が拷問に掛けられた話を聞いた際も「クライムと共にいるため王国を売り飛ばした」ことに対しても、微塵の罪悪感も覚ええない。あるのは「愛しのクライムが拷問なんてして正気に戻った際心を痛めないか」という心配だけだ。恐らく今までの自分ならば心配などせず「傷心したクライムを如何にして自分に依存させるか」を

第一に考えたはず。

(なるほど。価値観をそのままに行動原理を歪曲させる……。敵にも味方にも使いどころは無限にあるわね。上手く論文にしてナザリツクに活かせればアインズ様は御褒美をくれるかしら？久々にクライムとデートをしたいわ。)

ラナーのやる気が限界を超える。難解な数式と用語を駆使し、このマジックアイテムの有用性と有効活用方法、問題視すべき瑕瑾とそれに対する対処法。想定される敵の対応策と事前の策、自分の理論に対する反駁と回答を目にも止まらぬ早さで書き上げる。

その頭の片隅で思うのは鎖で繋いだ犬クライムとの幸せなデートであり、その様子だけをみればまるで夢見るお姫様そのものであった。



耐えがたい倦怠感と一時も身体を休められぬ焦燥感。相反する感覚が暴力的に混ざり合い精神を蝕んでいく。知覚は風に撫でられるだけで震えるほどに敏感となっており、脳信号はひどく原始的な「不快」という感覚ばかりを受信する。

夢か現かの区別もつかない不愉快で救済の無い眩暈げんうんの中、身体は体液と言う体液を出し切り、浮かぶ脂汗は黄淡色に変色している。

……予兆があつたかどうかは解らない。男に形容しがたい——否、形容する言葉などこの世に存在しない激痛が襲う。それは身体と心、人体を構成する細胞と脳と精神のひとつひとつが律儀にも悲鳴をあげているような絶望を催す激痛、男の意識は激痛に耐え兼ね数秒飛び、また激痛によって目を覚ます。

そんな無間地獄の中、異形の存在が……男にとっては天使とも思える存在が顔を出した。

「あらあん、良くない顔になってきたわねえん。見ていて辛いわあ。」  
「くひいをふえーこほひへふへー！」

口枷が嵌められていることなどすっかりと忘れ、男は大声をあげて。異形の怪物は細い指の間に小さなガラスの薬液容器薬液容器をかかげて

小さく振る。それを見た男は拘束を打ち砕かん勢いで異形の怪物に迫る。

「悲鳴をあげるほど辛いねえん。わたしも酷い事をしたくないの。一言、たった一言家族の居場所を話してくれるだけでいいのよん。そうすればまた幸せが訪れるわあん。」

男を最初に襲ったのはこの世の全てを対価にして良いとさえ思う……否、想像することも出来ない快樂であった。数多の神学者が論争してきた幸福の神秘が自分に宿ったのだと確信した。

……その後を訪れたのは、紛れもない、誤魔化しの利かない地獄そのものだ。激痛で失神し、更なる激痛で目を覚ます。目の前の怪物は悲壮な表情をしているようにも見えた。

男は……家族を同じ目に遭わせまいと数多の拷問に耐え続けていた元リ・エステイーズ王国の男は遂にその口を割った。

「やっと話してくれたわねえん。じゃあ、御褒美の時間よ。ただ痛めつけるだけなんて、わたしは間違っていたのかもしれないわね。」

男の静脈に注射針が刺さり、薬液が注入される。恍惚の表情を浮かべたまま、男はただただこの世に表す言葉の存在しない快樂に耽溺した。

●  
「なるほど。そう言う事ですか。」

「はい。デミウルゴス殿。さあいかがなさいますか？」

パンドラス・アクターはアインズ様より賜ったマジックアイテムについてデミウルゴスに説明し、彼は一瞬で至高の主であり創造主の意向を汲んだらしい。やはりナザリック一の知者は話が早くて助かる。毎回毎回“どういふことなんでありんすか？”と言われるのは、仕事であると割り切れていても疲れるものだ。

「では……。ここは着用を拒否いたします。アインズ様の勅命でないのならば、頭に浮かんだ意見をそのまま伝える事が正しいかと。」

「かしこまりました。その旨、アインズ様へご報告いたします。」

「自分の行動原理が変異してしまうマジックアイテムです。アインズ様でしたらわたくしが愚かな決断を犯しても明確に問題視はされな  
いでしょうが、既に多くの勅命を拝命した身。それらの仕事を完遂せ  
ず、一時の命令に翻弄されないか確かめられているのでしょうか。」

「麗しの守護者統括殿はかなり悩まれておられました。同じ結論に  
辿り着いておりました。」

「……彼女の場合は結論ありきで悩んでいる気もするがね。」

「父上……失礼。アインズ様はどちらに転んでも良い様に今回の「避  
難訓練」を提案されております。行動原理が変容すれば観察が行え  
る。そして常々説かれている「自分で考え」こんな怪しげで何が起  
こるか解らないアイテムを安易に身に着けない能力をどれだけのシ  
モベが有しているか把握できる。」

「宝物殿の領域守護者たる君を使うのも実に素晴らしい。敵を騙す  
には味方から」とも言いますからね。君に勧められればまず断るこ  
となど出来ないでしょう。」

「ええ。とはいえ、このマジックアイテムを身に着けたデミウルゴス  
殿には些か興味が御座いますがね。」

「それはわたしも同じことだ。おそらく黄金の姫が身に着けていなけ  
れば自分を実験台にしていたでしょう。あの女であれば、十分な情報  
を手に来る。」

「そこまで読まれていましたか……。いやはやデミウルゴス殿には脱  
帽いたします。」

「それにしても……君は本当に変わらないのだね。行動原理が一貫し  
ている事はアインズ様がいるためなのか、他の理由からか。君が羨ま  
しいよ、パンドラズ・アクター。」

デミウルゴスはパンドラズ・アクターの胸元で光るネックレスを見  
てそう呟いた。

## ラナーとクライムの休暇前日譚

「——っ!!」

言葉にならない艶めかしい嬌声が仄暗い寝室に木霊する。紅潮した顔に乱れた息とつややかな黒い長髪はその麗しい美貌も相まって、男性の理性を簡単に破壊する絵面となっている。……もつとも幸いというべきか、この場にそんな哀れな男は居なかつたが。

アルベドは今日も今日とて愛しのアインズの寝室へ赴き日課を行っていた。やはり愛する者のベッド上とは格別で、仕事が終わる自由な時間が出来ればいつもここに居たいとさえ思う。もし一人ではなく、愛しの主が寵愛を下さるならば、何だつてしてみせよう。

「はあ……はあ……くうー!」

本日の日課も終わり、乱れた息を整え、紅潮した顔が平静を取り戻して頭が冷えるとアルベドの表情に悔しさが滲み出る。

以前コキュートスが「勝利の美酒と敗北の酒の味の違い」を語っていた……とデミウルゴスに聞いた時は、いまいちピンと来なかつたが、今ならばなんとなく理解できる気がする。

ナザリック外からの初にして恐らくは最後となる現地人領域守護者「黄金の姫」が来てから、以前から懸念されていた頭脳労働におけるナザリックの人材不足はかなり軽減された。これは「守護者統括」【魔導国宰相】アルベドとしては喜ぶべきことなのであろうが……。

「本当に不愉快な女……。大人しくペットと戯れていればいいのよ。」  
あの女は、既にナザリック内の言語——アインズ様が美しいと一番好む言語——を完璧にマスターし、直属の上司たるアルベドの内政仕事のみならず、外交面ではデミウルゴス、財政面ではパンドラズ・アクターの手伝いをするなど、数多の功績を残している。

その優秀性は、こと【魔導国内の中等種に適応させる案件】だけに限れば、愛しの主へ二つの案——自分の発案とあの女の発案——を著者機密で採択を仰いだ場合、勝敗は4:6……アルベドが4となるほどだ。これであの女が愛しのアインズ様に恋慕の情など抱いていようものならば、自分は彼女を殺さずにいられただろうか？

当然ナザリツク内での管理上における知識は、アルベドに勝る者など愛しの主を除いて居ないだろう。だが、下等種を間近で観察してきた期間で言えば、悔しいがあの子に軍配が上がる。それも元リ・エスティーゼ王国の貴族社会などという愚者による醜悪な滑稽劇の中にいたならば尚更だ。

下等種が何を望み、どのようにすれば動き、如何に愚者を愚者のまま操るか熟知している。……それにアルベドがあの子に抱いている嫌悪は恐らく「嫉妬」だ。

あの子はナザリツクを利用して見事に自分の夢を叶えた。アルベドは大罪と知りながら、想像してしまうことがある。それは栄えあるナザリツクの繁栄とも愛しのアインズ様のお考えとも違う凋落的な不敬の極み。

この世界がどんどんと狭くなり、偉大なる主以外の全てが死に絶え、たった一部屋に主と自分が二人つきりとなった時……。その時初めて愛しの主は自分だけをみてくれるのではないかという破滅願望を孕んだ悖戻だ。

早々に不敬な想像を頭から打ち払い、あの忌まわしい部下とペットに褒美をやらねばならない。今日はアインズ様が自分の案ではなく、あの子の案を採択した屈辱的な日だ。悔しいが敗北から学ぶことがあると、アインズ様の金言を反芻し、己を律していくほかない。

「意図的に魔導国内でコントロールできる犯罪に身を窺す者を確保するため【賭博罪】の規制を大幅に緩和する案……。下等種の経済的破壊を狙うならば、意図的にこちらで賭場の確率をコントロールする方がいいはずなのに、何故アインズ様はあれほど嫌悪感を示したのかしら？あの子の確率論は確かに優秀だけれども……。」

アインズがイカサマ賭博を聞いて「運営が遠隔操作するガチャ」を想起した事情など知る由もないアルベドは偉大なるアインズ様の御考えに届かない自分を呪いながらも、忌まわしく優秀な部下の元へ指輪を使い転移した。

アルベドが去ったベッドと机と鏡しかない粗末な部屋。「たった一部屋の領域守護者」ラナー・テイエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフの守護領域にして、居住区画でもある一室で、ラナーは垂れていた頭を上げて、歌い踊り出したい衝動を抑えきれずにいた。クライムが戻ってきたら押し倒して××してしまえそうだ。

アルベド様が直々に来訪し、褒美として3日の休みを頂くことが出来た。他の守護者やメイドに至るまで、この地は「休むことは悪である」という風潮があるが、頂点に君臨するアインズ・ウール・ゴウン様は部下に休暇を与えることに寛大で、むしろ推奨している節がある。

最初はアルベド様の怒りを買うので自分たちも休暇の褒美を辞退していたが、アインズ様は押し付けるように休暇をとらせたがる。ラナーとしても机で計算するより、<sup>クライム</sup>犬と戯れ癒される時間が欲しいので、今では辞退せず積極的に褒美を頂くことにした。

「失礼いたします。ラナー様！ただいま戻りました！」

ノックの音と共に扉の外からクライムの声が聞こえてくる。ラナーは返事をする前に急いで鏡の前で「クライムの知る笑み」を作成し、熱に浮かされた脳みそを沈静化させる。

クライムは最初、ラナーの返事を待つてから入室していたが、一度ラナーが暗号作成の仕事に熱中しすぎ、ノックの音を聞き逃してクライムがほぼ丸2日間扉の前で立っていた事件があつてから——それはそれで可愛いのでどうするか迷ったが——5分間返事がなければ入室を許可している。

「あら、クライムお疲れ様。入って大丈夫よ。」

ラナーは自分のコンデイションを3分で整え、ベッドに座り<sup>たお</sup>やかな声で入室を許可した。

「はい！失礼いたします。」

「今日も訓練だったのですね。疲れたでしょう、一緒に座りましょう？」

本日も愛しの子犬の瞳が輝いている事に安堵と満足と恍惚の感情

を覚えながら、ラナーは座っているベッドの横にクライムも座るよう促す。その瞬間クライムは赤面し、ぎこちない足取りでラナーの横に座る。何度逢瀬を重ねようとクライムは従順さも純情さも陰ることが無い。やはり自分にはクライムしか居ないのだと確信させられる。

「ラナー様。先ほどアルベド様より直々に3日の休暇を賜る光栄を頂きました。ラナー様の御立場が悪くなることを考えますとその場でわたしが返答は出来ませんでした。辞退いたしましたでしょうか？」

ラナーは笑顔の裏で舌打ちをする。ふたりの時間に水を差すような真似をしたのは確実に嫌がらせだろう。いくらアルベド様とはいえ、アインズ・ウール・ゴウン様の決定は覆せない。とはいえ、休暇を取ることを不満に思っていることは確かだ。

個人的には直属上司のアルベド様の心証は悪くしたくないが、絶対支配者たるアインズ様の御慈悲を固辞し続けるほうがマズい。改めて自分の置かれる立場にげんなりとするが態度に出さず天真爛漫で能天気な姫を演じる。

「まあ！実はわたしも先ほどアルベド様から同じことを言われたの。きつとクライムが頑張っているおかげね。」

「いえ、ラナー様の御力があつてのことです。そしてこの手紙を一緒に渡されました。ラナー様でしたら読めば分かるだろうとのことでしたか……。」

クライムが渡してきたのは意味を成さない文字列としか思えぬぐちやぐちやの文字。……ラナーが以前作成した魔法を用いない暗号文章で、10の52乗×10の52乗恒河沙恒河沙の素数を用いた数式を基盤として作成された、アルベドとデミウルゴスの二人をもつてしても全文章の解読に1分6秒、暗号そのものの完全解読に7分を要した代物だ。エ・ランテルを中心としてナザリツク外の通信の一部で実用されたと聞く。

(あの女……完全に当て付けね。)

この地では脳内で愚痴をこぼす事すら危険と解つていても、あからさまな挑発が続きすぎ、思わず悪態をついてしまう。そこに書かれていたのは……

(簡単に休暇は貰えないか……。それにしても厄介払い？いいえ、嫌

がらせ？ 発案者がアインズ様かアルベド様かで対応の変わる案件だけれども、情報が少ないわね。」

「ラナー様、申し訳ございません。一体何が記されているのでしょうか？」

笑顔を曇らせたラナーを心配するクライムの瞳をみて癒されながら、ラナーは決定した休暇前の少し厄介な一仕事を告げる。

「アルベド様はわたしたちが3日間休暇をする前に、一つ外でお仕事を頼みたいご様子なの。でも外だなんて、こんな姿になったわたしを皆怖がるでしょうね。」

花が萎れたように演技をすると、予想通りクライムが慌てだす。

「そのようなことはありません！ たとえ種族が変わろうと、ラナー様のお優しさは不変であると、誰よりもわたしが知っています！」

背筋にゾクゾクとした倒錯的な快楽を覚えながら、ひとまず満足したラナーはクライムに目的の仕事を告げる。

「行き先はバハルス帝国。現在は魔導国の属国となったあの恐ろしい鮮血帝の治める国よ。」



魔導国属国、バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスは、宗主国より極秘にして他言無用の使者が訪れると手紙を受け取った際、最悪に最悪の想定を重ねた。……とはいえ以前の絶望的な胃痛は魔導国より下賜された指<sup>マジックアイテム</sup>輪の効果で感じることはなく、ただ抜け殻のように思索するだけだ。

バハルス帝国の歴史を遡っても、これほどの修羅場を、この若さで潜り抜けた皇帝はジルクニフが初めてだろう。

たとえ愚帝として青史に列するとしても、何の痛痒も覚ええない程度には凶太く——よく言えば人間味が増した、悪く言えば愚かに——なっている。今更どんな化け物がやってこようと驚かない自信はあつたのだが……

……現実には人間の想像する最悪など、嘲笑うよう超えてくるという

救済の無い事象を実感する。

「これはこれはラナー……えーつと、元王女と呼んでよろしいでしょうか?」

「いいえ、今のわたくしはアインズ・ウール・ゴウン様の一従者でしかありません。気軽にラナーとお呼びください。」

馬車から出てきた——引いているのは馬ではないが——のは、まるで劇の黒子を思わせる姿をした、片や桃色、片や黒のベールで全身を覆い隠した人型の2人であり、ジルクニフと3人となり初めてそのベールを脱いだ。ジルクニフが悲鳴もあげず叫ばずに対応出来たことは、鮮血帝の偉業として語り継いでも差し支えないだろう。

ラナーは横にいる従者の前で魔導国で働くに至った経緯を涙ながらに説明した。ジルクニフの観察眼を以ってしても演技には見えないう言動だが、確信できることはこの化け物が話す内容に真実など何一つないという事だけだ。

「それは……お辛い思いをされましたね。」

目の前の化け物の横で、従者である同じく小悪魔インプとなった少年と青年の中間を思わせる騎士が激しく睨みつけてくる。こちらには護衛はおろか秘書官すらいないというのに……。

リ・エステイーゼ王国の崩壊がもたらしたジルクニフの衝撃は大きい。自分の判断がひとつでも間違えていたら瓦礫の山となっているのはバハルス帝国の方だったのだ。……そして今後自分たちが絶対安全などという保障はどこにもないのだから。

(今この怪物とわたしを会わせる理由は何だ? この化け物は間違いなく母国の亡国に一役……いやそれ以上の加担をしている。そんな事をわたしだけに知らせるとするのは、本来デメリットでしかない。如何にわたしが秘していようと推察が噂となり、周知される恐れは大きい。そもそもラナー王女は、死体が発見されていないだけでこの世からいなくなったものと思われている。)

「どうしたのですかジルクニフ様。顔色が優れませんわ。」

「お前のせいだ!」と叫べたらどれだけ世界は素敵だろう。ジルクニフが簡単に思いつくのは、帝国内にも裏切者が居て、何時でも

リ・エステイーゼ王国のように滅ぼせる”ことを伝える事だが、既にフルーダという裏切者を抱えており、そんな真似をしなくても属国を滅ぼす理由などいくらでも捏造出来る。

(今度は何が目的だ、あの骸骨野郎！)

「ジルクニフ様は聡明であられます。我が母国も、早くにアインズ様へ忠誠を誓えたならばあのような結末にならず済んだのですが……。」

「ら、ラナー様。お涙を拭いて下さい！ラナー様は何も悪くないのです！」

となりの少年騎士からハンカチを受け取り涙を拭うその姿は、一見すれば心優しいお姫様そのものだ。少年騎士がジルクニフを睨む眼光が更に鋭さを増す。

(この指輪は胃痛こそ遮断してくれるが、幻痛までは遮断してくれないのだな。)

ジルクニフは思わずその姿に吐き気を覚え、胃を押さえる。同時にこの化け物の目的をようやく理解した。……いや、宗主国の使者が属国の皇帝と話をしたいと聞いた時点で一番に考えるべきことだ。

(魔導王がこの化け物に期待しているのは間違いなく頭脳だ。ならば、わたしの統治と忠誠度を確かめに来たか。この化け物相手ならばわたしだって身構えてしまう。いわばボロが出やすい。いやはや、わたしの嫌いな女ランキング不動の1位を使ってくるとは、流石。ははは。)

ジルクニフはそのまま椅子から崩れ落ち、乾いた微笑を浮かべながら、バハルス帝国の現状について国家機密レベルまで、ラナーに包み隠さず話をした。



「帝国でのお仕事大変ご苦労様。例の皇帝についてのあなたの私見は大変興味深いわ。では守護領域に帰還次第72時間の休暇を褒美として与えます。解っていると思いますが、ナザリックを出てエ・ラン

テルを散歩する際は事前に報告し、幻術の装備を忘れないように。」  
「かしこまりました。アルベド様。」

慈悲を称える微笑みに対するは宝石のような笑顔だが、その間には思わず後ずさりしたくなるようなオーラが立ち込めていた。……実際アルベド付きのメイドが少し顔を強張らせている。

しかしそれも一瞬のことで、ラナーは自分の守護領域に向かってスキップするように歩み始める。鮮血帝を前に自分を護るクライムの瞳は実に愛らしかった。もっともっとと愛でてやりたい、自分の非力を悔やむナザリツク内のクライムも素敵だが、姫を護る騎士としてのクライムの眼もまた甲乙つけがたい。

そしてあの眼がこれから逢瀬による罪悪感と快楽と背徳感で歪む姿は想像するだけで絶頂しそうだ。もっとクライムを知り尽くしたい。この世には自分の脳でも知らない事が、まだまだ沢山ある。

世界一幸せなお姫様は、これから訪れる幸せを胸に、偽りの無い笑顔を浮かべていた。

聖王国両脚羊牧場におけるアベリオンシープ嬰兒が、その両親ならびに牧場にとつての重荷となることを防止し、かつ牧場のみならずナザリツクに対して有用ならしめんとする方法についての私案

生殖行為は生物が持ち合わせる原始的な本能であり、アベリオンシープもその例に漏れず、幾匹かの嬰兒が誕生しようとしている。獣である両親に世話など出来るはずもなく、嬰兒が不遇な目に遭うことは火を見るよりも明らかだ。

しかしながら生物的本能として危急存亡の時分に子孫を残そうと、雄・雌問わず誰彼構わず管理の目を潜り抜け——意図的に見逃しているのだが——繁殖行為を行い、その結果懐妊する例も少なくない。

アベリオンシープは一般に懐妊から出産まで280日±15日の日数を要し、その間雌が牧場本来の業務——特に生殖実験——をこなせないことは由々しき問題である。一番簡単な方法は墮胎であるが、下等種とはいえ母親が私生児を殺すという恐ろしい事態に眉をひそめる牧場作業員と推進派の作業員の軋轢によって牧場業務の効率性が落ちることは何よりも危惧すべきことだ。

ここで、わたしは新生したアベリオンシープの利点を記すこととする。

古来文献より言い伝えられるよう、よく世話された健康なアベリオンシープは、本来であれば肉質が硬く栄養価に乏しい個体と異なり、丸一歳を迎えると、その肉質はとても柔らかく、滋養強壯の薬として効果の期待できる食物になる。 ※栄養学的知見、生物学的知見は別紙①参照とする。

また生まれたばかりのアベリオンシープは、丸一年間は母親の乳で育てられ、他の食べ物はずかで済む。母親のアベリオンシープは生殖実験以外の通常業務に従事してもらおう事で——不慮となる危険を伴わない程度という制約はつくが——本来食用に向かないアベリオンシープを栄えあるナザリツクの食卓に並べられる逸品と出来る。

慈悲深きアイNZ・ウール・ゴウン様が以前 “無垢な者は褒美として与えられない” と仰っており、ナザリツク内で無垢な者を欲しがることは禁忌となっているが、牧場でのアベリオンシープの嬰兒では問題がないと確認がとれている。絶対数が少ないため、高級食材となってしまうが、ナザリツク内で唯一褒美として与えられる品の数としては適当であると考察する。

調理法については料理長に確認をしているが、“古代チュゴク”なる場所では一般に食されていたらしく、秘伝の調理法を習得されている。それだけではなく、興味深い事に薬師のクラススキルを持つ者が“カンポ”という薬品として生成する能力を持っている事を確認した。

またアベリオンシープは魔導国統治下にある下等種の数十種に生息が酷似しており、国家？栄のため人口を意図的に操作する場合、懐妊から出産までのより正確なデータをとることが可能である。

ただ上記の私見はアベリオンシープが健康体であることを前提とした仮説であり、飢え瘦躯となった牧場のアベリオンシープであれば、望む結果は出せない恐れが高い事を記さなければならぬ。

その場合、牧場の屠殺場でアベリオンシープの嬰兒を解体するか、そのままシチューや丸焼きにする必要がある。獣でしかないアベリオンシープにはもつたいたない食事であるが、提供も吝かではない。

牧場で出生したアベリオンシープの嬰兒については、まだ研究が進んでおらず、母体の状態や環境による変化も観察対象として肉質・皮の状態をデータとして残す必要性があると具申する。

前述したようにアベリオンシープは生殖本能に基づいて、衝動的な行為に及んでいるため、母体となる雌が実験体となることを恐れ生殖行為を止めることはないだろう。

——最後に、これは完全に筆者の願望であるが、種族変更実験の被験者が子をなした場合、直々に観察とデータ収集を行わせていただきたい。



「お目汚しとなる雑記ですが、ご一読ください。正式な論文をお望みでしたら、後ほど清書し、アルベド様へ提出いたします。」

その場で速記された文章に目を通し、デミウルゴスは満足げに頷く。

「なるほど、これならばあの慈悲深いプルチネツラも納得するでしょう。」

デミウルゴスの牧場を見学し、牧場で起こっている問題点を一目で見抜いたラナーにお褒めの言葉がかかる。デミウルゴスがラナーを牧場に連れてきたのは突然だったはずだが、事前にアベリオンシップについての学習を済ませており、料理長や薬師のみならず、アインズ様へも御意見を伺っていた事には少し驚いた。

実際牧場の獣どもが後先考えず勝手に交尾をすることに困っていた。ラナーの意見を取り込めば、アベリオンシップの勝手な交尾を放置すべきかどうかという不毛な議論に終止符を打てる。

牧場運営は至高の主から一任されている仕事だ。この程度の些事で主のご意見を伺うなど恥と考えて逡巡していたが、やはり外部の意見と言うのは参考になる。そして目の前の精神の異形種の能力も再確認できた。

「ありがとうございます。デミウルゴス様。」

「守護者統括殿から聞いているように、我々ナザリックは優秀な人材に労は惜しみません。あなたの願望についても前向きに検討いたしましょう。」

ラナーはナザリックに貢献出来た喜びを胸に、ますます頭を垂れる。

ラナーは自分の守護領域兼居住区域に戻り、溜息を吐いた。小悪魔

の身体になってから肉体的な疲労はほとんど感じなくなったが、精神的疲労は別だ。いきなりデミウルゴス様があのような場所に連れて行ったのは自分に対するテストに違いない。

人間の残滓が残っていれば眉をひそめて然るべき場所で、自分の一挙手一投足を観察されていただろう。……もつとも、小悪魔化の前に連れていかれても、同じ挙動をとることが出来た自信はあるが。

「やはり羊皮紙スクロールの正体やナザリックの管理する全てについて予習していて正解だったわね。失望されずに済んだかしら。」

早くクライムに癒されたい。今日聞くべきは「最初の子供は男の子と女の子どっちがいいか？」にしようか。クライムは赤面し、慌てふためくだろう。その瞳を想像するだけでゾクゾクとする。

自分とクライムに子供が出来たならばどれほどの愛を注げるだろう。クライムの瞳はどう変化するだろう。……小さく質素な部屋で、夢見るお姫様は静かに微笑んでいた。

## あるマジックアイテムの話

—— Cheating Massively Distributed System ——

俗に「ゴーストプレイツール」とも呼ばれ、本来プレイヤーが行うべき操作をAIに記憶させて自動狩り・簡単なPKやPKK・自動生産を行わせたり、アイテムの湧くマップなどで目的の品を自動入手、一定数を超えると強制ログアウトとなる脳内ナノマシンの脳外排出量データを操作する、いわゆる「効率プレイ」を行う違法チートツールの1つだ。

ログインさえしていれば寝ている間だろうが、片手間で別の遊びをしていようが後は勝手に動いてくれるので、単純なレベル上げやアイテムの素材集めを目的として数多のDMMORPGで悪用されている。ユグドラシルも例に漏れず、アカウントBANを覚悟で使用している<sup>おろかも</sup>猛者が少なからず存在していた。

もちろん運営に発見されれば問答無用で公式ホームページ上に違反者の個人情報公開の上アカウントを抹消され、他のDMMORPGを運営する他社にも注意喚起として情報が渡り、使用した愚かなプレイヤーは二度とネット世界に入る事が許されない。下手をすれば現実世界<sup>リアル</sup>で後ろに手が回る……そんな代物だ。

このチートツールの厄介な点は能力値が異常に上がったり、動作が本来の許容を超えた速度になったり等の「俗語として用いられるチート」機能はなく、データ上では解りやすい違法性がみられない事だ。

ユグドラシルはプレイヤーの自由度を謳っていた理由もあり、「異形種アバターの非可動部位もしくはNPC可動のため組んだツール」と言い訳されれば、むやみやたらに取り締まる事も出来ず、運営と違法改造ツール制作者でいちごっこが行われていた事情がある。

しかしながら電脳法にガッツリ抵触しているだけでなく、粗悪な違法チートツールによる重篤な健康被害が問題になったことから、ガチ勢からすればR-18など比ではない——バレれば本人だけでなく、

使用者の所属していたギルドやクランのメンバーにもペナルティが課される——禁忌中の禁忌タブーであり、俗にいう「ギルドクラッシュャー」の警戒に、各ギルドやクランの長は対応を迫られる羽目になった。

「気に食わないプレイヤーやギルドを『違法改造使用者だ！』と運営に通報するのは、結構ありがちな嫌がらせ行為ハラスメントなのだ。」

いくらユグドラシルではDQNギルドの名声？を恣にした「アインズ・ウール・ゴウン」の面々として、一皮むけば生活のある社会人だ。違法改造ツールに手を染める愚か者など一人としていなかったが……

「これはまた、懐かしいものが出てきたな。」

それは銀の天秤で造られ、片方の皿に小さな羽が1つ乗ったマジック・アイテム。

本を正せばギルド長のアインズ（当時モモンガ）に運営から配布された「相手が『違法チートツール使用者』か判断するアイテム」ではないのだが、タブラ・スマラグディナが着想し、大学教授だった死獣天朱雀が知識を提供、ガーネットが魔改造し、ヘロヘロ、ホワイトブリム、ク・ドウ・グラーズも悪乗りしてプログラミングに協力し改造を重ねた結果、独自の進化を遂げたマジック・アイテムだ。

「シズ……いえ、ガーネット様の部屋より発見された代物であり、シズでも用途が解らず、我々では手が付けられないと恥ずかしながら御身の手を煩わせる判断をいたしました。」

臣下の礼をとるのはユリを筆頭とするプレイヤーアデス達。てつきり宝物殿あたりに仕舞ったと思っていたが、ガーネットの研究室に眠っていたらしい。

「そう恐縮するな。報告はとても大切だとルプスレギナにも散々言っていることだからな。」

「御多忙を極める御身を煩わせるわたしたちを御赦してください。」

「なに、今日は偶然時間が空いていた、その幸運に感謝……」

その瞬間、天秤の片方……空の皿がカツンと音を立てて傾いた。その瞬間、アインズの自律神経——そんなものないが——が乱れて内心が冷や汗で濡れる。

……このマジック・アイテムは簡単に言うと【嘘発見器】であり、偽

りの言葉を話すと天秤が傾くように構成されている。

つまり、常に暇であるアインズが「今日は偶然暇だった」の言葉に反応し、起動してしまったわけだ。プレイアデスたちは自分たちの前では何一つ起動しなかったマジック・アイテムの挙動に大きな関心を示している様子だ。

「こ、これは言霊を計るマジックアイテムだ。言葉には魂が宿る、その重さを……計測するマジックアイテムだったはずだな。」

アインズが？八百を並べている間も、天秤はカツンカツンを音を鳴らし続けている。これが【嘘発見器】だとバレれば今まで築き上げた支配者ロールの全てが台無しになりそうだ。

「そんな……では私たちの忠誠の言葉は、御身に届くことの無い紛い物であったと……。」

(ああああーそっちに話が行っちゃうか！)

プレイアデスだけでなく本日のアインズ当番である一般メイドまでもが血相を変え、慚愧の念を宿している。「言葉の重み」なんて大層なワードを使ったのは失敗だった。NPCの忠誠仲間たちの子供が足りないを取られてもおかしくない。アインズはがらんどうの脳内で上手い言い訳を探しだす。

「いや、このアイテムは我々……お前たちが至高の御方と呼ぶ41人にしか通用しない代物だ。我々の仲間である証ともいうべきか。シズ、このマジックアイテムは見なかった事にして元あった場所に戻しておきなさい。もし仲間がこの世界にきていたら使う日もあるだろう。存在についても他言無用だ。」

アインズの口八丁にカンカンカンと警報のように？発見器が反応するが、確かめる手段はない。これ以上はボロが出る。早々にアインズはこの修羅場を潜り抜けたかった。

「……………畏まりました。博士たちが戻るときに。また。」

シズは恭しくアインズから「至高の41人を識別するマジックアイテム」を受け取った。アインズはなんとか乗り切れただろうか、心の中で深呼吸の真似事をしていた。

「ねえシズ。なにやら面白いマジックアイテムがあると噂に聞いたのだけれど、見ることは出来ないかしら？」

「……………何の話かわかりません。」

「そう？何でも至高の御方々の所在が解るアイテムだとか。」

「……………何の話かわかりません。」

「アインズ様が望まれる搜索隊の構想でとても大切になるのだけれど…………。早く皆を至高の御方々にお逢いさせたい、そのために必要なのよ。」

シズの部屋に封印された、既に音を聞く者がいないマジック・アイテムがカツン、カツン、カツンと3度音を鳴らした。2度はシズの白を切る言葉に反応して。

もう一つは…………

## スパリゾート ラナー様&クライム編

「いいお湯ね。クライム。」

「さ、左様でございますね！ラナー様！」

ここはナザリック第9階層「スパリゾート」。本来男湯と女湯で分かれているのだが、現在二人が浸かっている「露天風呂」だけは常時男女混浴が許されており、ラナーがクライムとスパリゾートを使用する際はいつもここを選んでいる。

一糸まとわぬ姿となったラナーから目を逸らし赤面しながら恥じらいつつ、同じく一糸まとわぬ姿でありながら健気にもラナーを護ろうと脳が混乱しているクライムの純然たる瞳を眺めながら、ラナーは温泉を楽しんでいた。

【花見】や【月見】など、露天風呂には様々な楽しみ方があるらしいが、露天風呂の周りにある荘厳な木々や満開の花々、星々の照らす夜景など、クライムの瞳を彩る装飾にもなりはしない。

とはいえ、星々には少し思うところがある。露天というだけあり、空を見上げれば墳墓の中……地下でありながら、満天の星を模したであろう夜景が煌めいていた。

（やはりわたしの知っている星空ではないわね。一体どの世界の夜景なのかしら？）

王女だった時分、部屋の窓から天体を観測し星の位置と運用、天体と地上を結ぶ線のズレを計算し国家機密の地図よりも精密なり・エスティーゼ王国地図を作製したことのあるラナーだ。見上げる夜空は自分の知っている天体とまるで異なっている。

あの智謀の怪物アインズ・ウール・ゴウンであれば、詳しい事を聞けば教えていただけるだろうが、現在の業務で特段必要な知識とは思えないので、アッシュユールパニバル最古図書館で最低限の知識——天文学者として財を成せるレベルだろうが——を嗜む程度にとどめている。

そしてちよつとした悪戯を思いついた。ラナーは天真爛漫なお姫様の口調と表情を作成し、クライムに話しかける。

「そうそうクライム！流れ星の素敵な言い伝えを知っている？」

「流れ星……ですか？」

クライムの常識で考えると、流星といえば「誰かの命が消えようとしている象徴」というのが一般的で、素敵という言葉とは程遠い。しかしラナー様が間違いを言うはずもない。となれば自分の常識が間違っていたのだろう。

「流れ星が消えるまでの間に3回願いを唱えると、その願いが叶うんですって。何処かに流れ星があるのかも。」

もちろんそんな効果があるはずもなく、ラナーの調べた限りでもおまじないの類でしかない。そう言っただけでラナーはクライムに夜空を見上げるよう言葉を掛ける。露天風呂の夜空を模した景色はこの時間、1/2の確率で流れ星が現れる仕様になっていたはずだ。

ラナーの予想は的中し、夜空に一筋の流星が現れ……

「ラナー様を御護りできますように！ラナー様を御護りできますように！……ああ……。」

クライムは切迫した様子で早口に願いを口にする。しかし3度言う前に夜這い星は儂く消えてしまった。クライムは落胆した様子で目を伏せ……、その瞳を見て、ラナーは小悪魔の羽を小刻みに震わせていた。

自分の言葉を素直に信じる子犬の瞳、一番に自分の身を考える純粋な瞳、願いを唱えられなかった不甲斐なさに落ち込む瞳。あまりの愛おしさに気が狂ってしまいそうだ。ここが公共の場でなければ襲っていたに違いない。

しかしここは幸いにも浴場だ。クライムを可愛がるのは守護領域に戻ってからたつぷり行うとして、ここでしか行えない事に専念しよう。

「ふふ、クライムの気持ちはとても嬉しいわ。……そうそう、翼の後ろがどうしても上手く洗えないのよね。クライム、背中を流して貰えるかしら？」

クライムの身体が硬直し、目を泳がせている姿に倒錯的な快感を覚えながら、ラナーはクライムに背を向ける。本来浴場内で洗体することとは無作法らしいが、ここに咎める者はいない。そしてスポンジや布

などがこの場に無い以上、【背中を流す手段】はひとつしかない。

「はい！大切な従者の役目……でしたね！し、失礼します！」

つまり、クライムの想いのこもった手のひらだ。瞳が見られないのは非常に残念だが、ぎこちない温かな手が背中をすべるたび、ランナーはゾクゾクとした快感を覚える。

しかしスパリゾートでのランナーの楽しみはこれからだ。一通り背中を流し終えたクライムにランナーは決定的な一言を告げようとする。いけないいけない、油断すれば思わず吐息が漏れだしそうだ。

「ありがとう。じゃあ、今度はわたしがクライムを綺麗にしてあげる。」

ああ……この瞳だ。国をひとつ売るだけでこんな幸せが手に入るなど、本当にいいのだろうか？ランナーはただただ幸せだけを噛みしめていた。

## 皇帝の滑稽劇

「はあ……。」

魔導国属国、バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスは属国になってから何度目か数える気にもならない溜息を吐いた。

前世でどんな悪徳を積みあげれば自分はこんな目に遭うのか——なんて一瞬考え、現世での行動にも心当たりがありすぎることに思わず苦笑する。

そして気が付けば机に突っ伏してしまっていた。

「へ、陛下ー！どうされたのですか!? その手紙には一体なんと……。」

対面に座る筆頭書記官のロウネ・ヴァミリネンが思わず椅子から立ち上がる。宗主国であるアインズ・ウール・ゴウン魔導国より手紙が届き、文書に目を落とす度どんどん顔が青白くなっていくジルクニフの様子からロクな内容ではないことは推測出来たが、ロウネの前でここまで取り乱すジルクニフは初めて見る。

「ああ、陛下だが……。ちよいとミスをやらかしたみてえでな。その罰だからねえが、なんでも例の魔導王様から『余興の場で一芸を披露しろ』なんて言われて凹んでやがんのさ。」

「ば、バジウツド殿！ 一つの間!? 何処にいるのですか!?!」

この部屋にはジルクニフとヴァミリネン以外おらず、護衛には宗主国より送られたデス・ナイトが駐留しているのみ。ヴァミリネンの表情が困惑に彩られる。

「……なんてな、わたしだ。」

ヴァミリネンが声の出処を探している間に、ネタバラシがおこなわれる。ジルクニフによる声帯模写だ。墳墓での舌戦前に披露した口を開かずに出す技術然り、奇術や手話然り、ジルクニフは本人の生まれ持った器用さもあり、皇帝の嗜みとして何時何処で何の役に立つか解らない技術を数多習得している。

今披露した声帯模写もそのひとつで、その気になれば容姿も味方して一流の役者として食べていけるだろう。

こんな特技をもっているなど初めて知ったヴァミリネンは自分でも判別出来なかつた高度さに驚くと同時に、昔——属国となる以前——ならばありえない茶目っ気を見せるジルクニフにやや危機感を覚えもした。最近のジルクニフは、失つてはいけない王の威厳さえどうでもよくなつてきている節がある。

人間味が増したと言えは聞こえはいいが、あの血族や貴族達を肅清し、バハルス帝国を大国へ導いた偉大な鮮血帝は戻つてこないと思うとやはり悲しい。

それでも帝国中をひっくり返してもジルクニフより優秀な人間などいないであろうし、青天の霹靂という言葉さえ稚拙に思える一連の大惨事をその一身に受け止めながら精神の荒廃を起こしていない——自分ならば間違いなく廃人か狂人となつていただろう——事自体、鮮血帝の偉業として語り継いでも差し支えないと理解はしているが……。

そんなヴァミリネンの心境をよそに、ジルクニフは受け取つた手紙をヒラヒラと持て余す。

「先日我が国から【死罪相当の罪人】を送つた際、その中にまたも冤罪者がいただろう。2度目まではお咎め無しだったが、3度目となると流石に罰があるようで、今回魔導王陛下はわたしに滑稽劇の道化師を演じる事をご所望だ。散々演じてきたつもりだがな。なんだつたか、〴〵神のご慈悲も3度まで」とは法国の諺ことわざだつたか？次しくじればわたしの首が飛ぶかもしれないな。」

「も、申し訳ごいけません！陛下！魔導国より豊穡な人材を預かりながら法務省の改善・改革を怠つた我々のミスです。」

「構わん。真相の究明よりも罪人の引き渡しを優先させるよう命令したのは、誰でもないこのわたしだ。」

2度目の冤罪者が送り返された際、魔導国より〈支配ドミネート〉や〈魅了チャーム〉といった精神支配を扱えるエルダー・リッチが共に送られてきて法務省の改革を急いだはずだ。しかし、万全とはいかず不備があつた。その結果、敬愛すべき皇帝陛下に罰が与えられるなど、臣下として首を刎ねられてもおかしくはない。というよりもヴァミリネン自身が死

を以って償いたい忸怩たる思いでいっぱいだった。

「そう暗い顔をするな。冤罪を完全に無くするなど不可能だ。それこそ直接脳内を覗く力でも無い限り……」

一瞬ジルクニフの表情と眼光が鋭くなり——すぐに頭を振って先ほどまでの気だるさを孕んだ憂鬱な表情に戻る。……その動作が属国管理に際し「ほどほどの無能であろう」と己を定めたジルクニフの覚悟であることはヴァミリネンにも伝わった。

あの智謀の怪物がジルクニフに課した罰にはどのような意味があるのだろうか？ 臣民の前で皇帝に滑稽劇の役者を演じさせるなど屈辱を与えるには一番の罰であるが、こんな真似をすれば今後の統治に差し障る。魔導国は属国統治に皇宮を見捨てたという考えにまで至ったあたりで……

「まあ、済んだことは仕方がない。再発防止に努めよ。わたしが一芸を披露する場所だが——」



時は少し遡り……

アインズは罰を懇願するアルベドにどのような対処をするべきか頭を悩ませていた。

バハルス帝国から定期的に送られてくる死罪相当の罪人。その中に3度目となる冤罪者が居たためだ。アインズにとっては自らが最終判断を行うため特別気にしておらず〈記憶操作〉を研磨する格好の実験場でもあり、今回得られた情報は興味深いもので、褒美を渡したいくらいだ。

というのも、送られてきた冤罪者は「自らを罪人と思いきんている精神に変調を来した人間」であり、〈支配〉や〈魅力〉で見抜ける存在ではなかった。しかし記憶を探ると犯罪を犯した事実は見あたらず、【病的妄想と実際の記憶は区別が付けられる】という有意義な情報が手に入った。これが幻覚を伴う場合どのように変化するか検証し

ていく必要があるだろう。

しかしアルベドは「信賞必罰は世の常」であることを譲らず、褒美は褒美、罰は罰と分けるべきであると、まあ解らなくもない意見を述べている。

なにより「わたくしに屈辱と言う罰を与えてください！」と目を爛々とさせているアルベドの迫力に圧されて、いつもの支配者ロールの出鼻を挫かれたのも大きい。この時点でアインズの負けだ。

いつかシャルティアに命じたように「椅子になれ。」と命じればその場しのぎになるが、この程度のミスで一々その罰を与えていけば、玉座に座る時間よりもアルベドに座る時間の方が長くなってしまふ。

「アルベドよ、今回お前は3度目のミスが起きないよう最善を尽くした。そして今回のミスは不慮の事故に近い構造上不可避の不条理なミスだ。ならば行うべきは罰ではなく構造の欠陥を改善する事であり、ええと……」

少し出遅れたが支配者ロールを行うアインズ。だが、説得しようと意気込みすぎて難しい言葉を使い過ぎた。感じるはずのない頭痛が襲い、精神が摩耗する。アルベドとは意見が平行線であるし、これ以上はアインズの精神が持ちそうにない。最低な方法だが現状を回避する方法を思いつき、思わず心の中で詫びる。

(すまん！許せジルクニフ！ちよつと生贄になつてくれ!!)

「しかしアルベドが最善を尽くしながら活かせなかったバハルス帝国にも少し問題があるかもしれないな。軽い……本当に軽い罰を与えることとしよう。」

「かしこまりました。バハルス帝国法務省の人間たちを一族郎党連座させ、氷結牢獄送りにいたします。」

(違う違う違う!!なんでそう過激になるんだ!)

「その必要はない。バハルス帝国には飴を与えると云ったはずだろうか？一々ナザリック式の罰を与えては、わたしの計画が台無しとなる。実験も兼ね、最も軽い罰でいいだろう、そうだな……」

(何がいい？少し嫌な思いはするが、後で笑い話になるような……。えーつとえーつと。)

アインズはナザリック式にならないような罰を考える。鈴木悟時代にまで記憶を手繰り……

（一発芸でもさせるか？ 思えば取引先の接待で一番苦痛だったな。今考えても意味が解らない風習だ。だがそれで水に流そう。うん、これでいこう。）

「そうだな、与える罰であるが——」



ジルクニフが転移門<sup>ゲート</sup>を潜り案内されたのは薄暗い天幕の中であった。自分の披露する余興を見る面々を観察する。

アインズ・ウール・ゴウン、魔導国宰相アルベド、猛禽類の様な鋭い瞳を持った老執事、そしてメイドが2人に……小悪魔<sup>イエンブ</sup>の姿となったジルクニフ的嫌いな女不動の1位ラナーとその少年従者。

自分が本職の道化師で、客がこの面子ならばどんな心境だっただろう……なんてジルクニフは変な興味を抱いてしまう。

宗主国が属国の指導者に臣民の前で三跪九叩頭の礼をはじめとした屈辱を与え、立場を明確とする手法は昔からあったが、目の前の骸骨野郎がジルクニフに行わせているのは、本当に宴の余興だ。相手の意図が全く読めない。

とはいえ目の前の智謀の怪物が無意味に余興など行わせるはずがない。意図が解らない以上、道化師の役目を全うするほか無いだろう。

ジルクニフが選んだ余興は帝都でも有名な吟遊詩人<sup>バイド</sup>の唄とタロットを使った奇術を合わせた、卓上演劇とも題するべきジルクニフオリジナルの演目だ。

……とはいえカードがすり替わるトリックや布から小道具が出てくる簡単な奇術に驚いているのは二人いるメイドの一人とラナーの従者くらいなもので、全員表情を——アインズ・ウール・ゴウンはそもそも表情が読めないが——変える様子はない。

どんなトリックを使っているかなど、瞬きする間も無く見抜かれて

いるに違いないだろう。それでも2人反応しているというのは結構意外なことだ。

「そうして不死を得た少女はただ一人となり、彼女の想いはこうして失敗に終わったのでした。」

一連の演目を終え、ジルクニフは深々と一礼をする。その瞬間拍手が響き……どんとその数が増していく。最初の拍手はアインズであり、合わせるように皆が追随し、大きな喝采となる。

「大変興味深い演目であった。さて、これにて禊は済んだ。間違いないな、アルベド?」

「はい、アインズ様。」

「では次は褒美だ。信賞必罰は世の常。詳しく話すことは出来ないが、今回貴国の行いは【罰】と【褒美】が混在するものであった。差し引きでお咎めをしないという真似をわたしは好まない。ジルクニフ殿には恥をかかせてしまったな。許してほしい。」

「ほ、褒美でございますか?」

“そんな余計なものはいらないからさっさと帰してくれ”と言う訳にもいかない。そういつてアインズが空虚からとりだしたのジルクニフの知識には無い薄褐色をした水薬ポーションだった。

● 「陛下ご無事ですか!」

転移門ゲートから出てきたジルクニフに、ヴァミリネンが切迫したように声を掛ける。

「ああ見ての通り……。と言っても見た目で判断出来ないのが難しいところだな。わたしがジルクニフを模した悪魔でないことや、洗脳されていない事を証明する手段はない。」

ヴァミリネンはジルクニフの言葉に少し安堵を覚える。あの魔導国相手では甘い考えかもしれないが、軽々に安心させる言葉を吐かないのは、ヴァミリネンの知るジルクニフだ。

そしてジルクニフの手に演目で利用した小道具の入ったカバンの

ほかに、小さな宝箱を持っていることに気が付く。

「陛下、そちらは？」

「褒美……だそうだ。水薬ポーションが入っている。効用については口を濁していた——というより『飲めば解る』と言いたげな様子を見るに、わたしを異形種にする類かもしれないな。」

「水薬ポーション一本でそのような……」

あり得ないとは言い切れない。

何しろ相手は一つの魔法で18万人の大虐殺を敢行できる化け物の中の化け物だ。——ジルクニフも、ラナーの現状を知った以上、この一連の茶番劇は自分を異形種にする作戦か、その前段階ではないかと考えている。

人間と異形種の和平は魔導国の国是であり、バハルス帝国もエ・ラントルほどではないが巫人を受け入れつつある。『人間が多数を占める国で、トップの人間が異形種に変化すればどうなるか』。

その実験場で一番効率的なのは、間違いなくバハルス帝国であり、対象となる人物はジルクニフだ。

(悔しいがわたしにあの女ラナーのような智謀はない。精々貴重な実験動物といった価値だろう。)

「……如何いたしますか、陛下。」

「飲むも飲まないも自由であるらしい。……これは切り札となりえる。あの怪物が本当に皇宮へ愛想を尽かした際、わたしがこれを飲むことで、命乞いの交渉道具にはなるだろう。ならば今は保存しておく。」

「かしこまりました。では宝物庫で嚴重に管理を致します。」

……そうしてジルクニフに送られた褒美。【育毛剤】はバハルス帝国宝物庫で静かに眠る事となった。

## Bunny Girl の真相

七姉妹が<sup>プレイアデス</sup>お茶会を行ういつもの部屋。今回の集まりは月例報告会ではなく、〃時間があるなら集まってほしい〃という珍しい呼びかけだ。予定の時刻より少し遅れてやっていったルプスレギナは、いつもと違うひとつの光景に思わず二度見する。

「ナーちゃんどうしたんすか？そんな恰好して。」

「〃そんな恰好〃とは随分な言い草ね。式式炎雷様がわたしの為だけに着用を許して下さいった衣装、バカにするならあなたでも許さないわよ。」

ナーベラルは茶化してきたルプスレギナを睨みつけるが、ルプスレギナは悪童じみた笑みを絶やせずにした。

普段のナーベラルでは考えられない、非常に露出度の高い衣装を身にまとっており、普段であれば威厳さえ称える大きな胸の谷間を惜しげもなくさらけ出して、長くきめ細やかな足は伸縮性を持たせた半透明の布地で強調され、扇情的としか言いようのない格好となっている。

更には姿を変える3つの魔法を発動させており、正直その姿でスゴまれても可笑しいだけだ。

戦闘メイドプレイアデスが一人ナーベラル・ガンマは至高の御方、式式炎雷様より――

〈兔の耳〉：周囲の音が聞こえやすくなる。  
ラビッツ・イヤー

〈兔の尻尾〉：相手の敵対値を若干下げる。  
バニーテール

〈兔の足〉：自身の幸運値を上昇させる。  
ラビッツ・フット

――の3魔法が扱えるよう創造されている。ナーベラルはヘナーベ〉としてエ・ランテルを警邏する中でラビットマンなる種族をみたことがあるが、自分の発動する魔法のような能力はなかった。何よりこの格好は上記の3魔法を同時に発動させなければ得ることの出来ない衣装なのだ、自分に賜った能力にはきつと深い御考えがあるはずとナーベラルは確信している。

「いや〜。別にバカにしてなんていないっすよ!?!ただなんというか

……」

「ただなんというか……の続きは何かしら？返答次第では……」

「あ！そう言えばユリ姉達何処つすか？いっつもわたしが最後なのに！」

露骨に話題を逸らすルプスレギナだが、ナーベラルは溜息を吐き、怒りを霧散させる。

「自慢している事じゃないでしょう、全く。」

「ユリ姉様とソリュシヤンとシズわあ、ナーベラルのその衣装の意味を調べに最古図書館へ出張ちゆく。」

デミウルゴスの牧場で廃棄されたアベリオンシープをボリボリと食するエントマが代わりに答える。そして同時に扉が開き、ユリ・アルファ、ソリュシヤン、シズが戻ってきた。

「調べて来たわよ、ナーベラル。」

「ありがとうユリ姉様！ソリュシヤン！シズ！」

「もー、自分で調べりゃいいのにつす。」

「ナーちゃんったら自分で調べようと努力したけれど、最古図書館で頭から湯気を出して固まっていたみたいなのよ。司書長からSOSがきてわたしたちが呼ばれた訳。」

「ちよつとソリュシヤン！その話はいいでしよう！」

ナーベラルが赤面し同じ三女を睨む。自分が頭脳労働に向いていないことは百も承知だが、見せた失態は許されるものではない。

「はいはい喧嘩しない。……それでナーベラル。結論から言うけれど、わたしたちでも有益な情報は多く集められなかったわ。司書長が言うに、【検閲】が掛けられているんじゃないかという話。」

【検閲】？」

「簡単に言うとは焚書……言論弾圧のようなものね。ただアインズ様はたとえその知識が危険なものであろうと管理の徹底こそすれ、絶やす真似を好まれないので、他から圧力が掛かったと見るべきだわ。」

実際アインズはバハルス帝国を属国とするに際し、旧常識を記した書物の焚書を「本を燃やす者はやがて人を燃やし、最後には己を燃やす」という金言と共に禁止し、ユリはその慈悲深さに感銘を覚えたも

のだ。

実際は神話・歴史を愛するタブラ・スマラグディナや、自然を愛するブループラネットを代表に「【検閲】や【焚書】といった言論弾圧に何かしら思うところがある面々」——凝り性の集まりであったギルドのほぼ全員だが——が常々アインズに説いていた言葉の引用丸クリであるなど、プレイヤーアデスが知る由もない。

「栄えあるナザリックが他勢力から言論弾圧を受ける？現実的とは思えないわね。」

「そうね。でもナーベラルの身にまとう衣装……【バニー衣装】というらしいけれど、その歴史や由来が鎖を断ち切る様に、不自然に途絶えているのは紛れもない事実よ。」

「となると、至高の御方々により封印される禁忌の情報となった……。という事かしら。」

「ソリュシヤンの考えが現実的でしょうね。アルベド様やデミウルゴス様のお知恵をお借りすることも考えておくべきだわ。」

「………御多忙を極めるお二方に？」

シズの指摘にユリは顔を曇らせる。確かにこの案件は解決を急ぐものでもなく、更に言うなら問題と言うよりも疑問だ。プレイヤーアデス七姉妹で終わらせるべき課題だろう。とはいえ可愛い姉妹のため、【バニー衣装】の真相を解き明かしたいのは事実だ。

「なら『アレ』の知恵を借りるのはどうかしら？」

「……ソリュシヤン。アインズ様が『領域守護者』と定めた方を『アレ』呼ばわりするのは良くないわよ。」

ナザリックにやってきた二番目の現地人にして初の領域守護者。その智謀はナザリックと御方より定められたデミウルゴス様と比肩するほどで、既に数多の功績を残している。……ただユリは庇護欲をくすぐるツアレと違い、彼女を何故か好きになれない。アンデッドであるユリを以って、不気味な印象さえ抱かせる正しく【精神の異形種】だ。

「………この結論になると思って既にアルベド様から許可を得ている。じゃじゃーん。」

シズが棒読みの効果音と共に扉を開く。そこには笑顔を湛える  
黄金の姫”とそのペットが居た。

「シズ!? いつの間にか?」

「……………情報戦は速度が命。博士が言っていた。」

そういつてシズは翠玉エメラルドの片目を光らせサムズアップした。……ついでにエントマの「おやつ」を速やかに隠していた。



お茶会の卓に案内され、少ない資料を読み終えたラナーは小考し、紅茶を口に含んだ。ペットである少年騎士は後ろで直立不動の体勢を取っている。

「それで……………如何……………ですか? ラナー……………さ……………ま……………」

「わたくしには敬語を廃して接してください。ラナーで構いません。」

ナーベラルの無理やり取ってつけたような敬語に苦笑しつつ、ラナーは手で制する。仮にも領域守護者と戦闘目的が主とはいえメイドでは上下関係は明確だ。しかし自分がナザリックでもろ手を挙げ歓迎される立場でないことを知っているラナーは気に留めない。むしろ無用な摩擦は避けるべきだ。

「確かに【バニー衣装】だけを調べると不自然に情報が消された可能性が高いですね。〈官能的〉と判断されたのかもしれない。」

「官能的……………? どういう意味かしら?」

ナーベラルは自分が御方より賜った衣装を下劣なものとバカにされた気がして声に嫌気が宿る。

「そのままの意味です。わたしも最古アッシュユールバニバル図書館で様々調べものをする際覚えた違和感なのだけれど、〈官能的〉とされる情報はあえて多数の書物に知識を分散するか、暗号化されているものもあったわ。」

……………更に言うならば、政治制度、文化慣習、社会動向においても同様……………もしくはそれ以上に秘匿が施されており、社会制度において性差や種族差を持つ者に対する情報にも何らかの強い規制が掛けられていた。

おそらくナザリツクのあつた世界というのは、独裁に近い過剰な専制君主制でありながら、公民権運動や社会運動が活発……又は活発だった、という大きな矛盾を孕んだ歪な世界だったのだろうと考察できる。

とはいえ、そこまでの情報を話すつもりはない。愛しのクライムがナーベラルの胸の谷間に目が行かないよう必死に己を律している姿を見て、ラナーは既に怒髪天なのだ。あとでおいたをした犬には、臍も兼ねて泣いても叫んでも喚いても許さないほどの愛情を注いでやらないといけない。

そんなにバニー衣装が好きならば、シャルティア様に相談してみようか？ 確かシャルティア様の部屋にも一着くらいあつたような気がする。……もちろんその情報も伝えるつもりはない。

「あなた至高の御方の暗号を解いたというの!？」

しかし七姉妹プレイアデスが反応したのはラナーが情報を小出しにしたことではなく、別の事だった。確かにこの地の者が【至高の御方】と呼ぶだけあり、ラナーですら暗号の完全解読は出来ていない。

そもそも鍵となる未知の言語——ナザリツクで使用されているものではないようだ——が必要な他、幾多もの斬新なアイデアと数論やトポロジー・機密設計等々、多方面からの介入が必要で、ラナーが本気で0から解読を試みるなら2ヶ月は暗号だけに専念し、ようやく解読できるだろうという代物だ。

しかしこの地の神が創造した暗号を解いたという悪評のほうがマズいと考えているので、完全解読は諦め一部の解読に留めている。

「至高の御方が残されたヒントをもとに、本当にほんの一部だけが。」

七姉妹プレイアデスたちのラナーを見る目が変わる。羨望・嫉妬・慚愧・汗顔・敵意・畏怖と様々な感情の混ざった瞳で、愛しのクライムを穢した者たちに一矢報いた気分だ。クライムはどんな表情をしているだろう？

「話が逸れましたね。要するに【バニー衣装】だけ絞って調べても真実は見えてこないと言う事です。」

「それじゃあ最古図書館の書物から地道に調べていくしかないという訳ね……。」

それがどれだけ途方もない時間を要するか計算する気にもならない。部屋が重い空気に包まれる中、屈辱的な一言が発せられる。

「わたくしの知っている範囲でよろしければお教えいたしますか？」

【精神の異形種】の太陽のような笑顔が、七姉妹たちにとって、まるで悪魔の微笑みに思えた。

●  
アインズは一般メイドのによる半自動ドアを潜った先の光景を見て動転し、一瞬で沈静化される。そこにはいつものメイド服ではなくタキシード風の衣装に身を包んだ七姉妹と、バニーガール姿のナールがいた。

「アインズ様、本日はわたしたちに御身へ興を献上する誉れを賜り幸甚の至りにございます。」

大きな胸が邪魔をしてタキシードがまるで似合っていないユリ・アルファが代表し臣下の礼をとって挨拶を行う。アインズは「モモン」扮するパンドラズ・アクターから最近ナーベラルの活躍が著しいという報告を聞き、褒美を与えることにした。

その内容は「御身に興を献上したい」というもので、褒美になるのか凄く迷ったが、珍しい事にその瞳には確固たる意志が感じられこうして時間を取った。

ここはナザリック第九階層「カジノ」、スロットマシンやルーレット、カードゲームや、トランプではバカラやブラックジャック、ポーカーの卓を初めとして、様々な設備がある広大な施設の割に、ナザリックで働く者が賭博に現を抜かずもなく、ほぼ放置されていた場所だ。

……しかしアインズにとっては思い出の場所であったりもする。アークロジーに対抗し造り上げたほぼ意味を成さない第9階層大半の施設と違い、全員が集合するまでの時間や暇つぶしに何度も仲間た

ちと遊んだことのある場所だ。

カードゲームではぶにつと萌えさんに勝てる者が誰もおらず、ウルベルトさんとたっちさんがポーカで嫌味を言い合いながら火花を散らし、ガーネットさんがスロットマシンの前にして「もつと改良する点は……」とぶつぶつ呟いていた記憶が想起される。

「で、で、でわ、アインズ様。ご、ご案内をさせていただきます!!」  
赤面しきこちない動きでエスコートをしようとしてやってくるバニー  
ガール姿のナーベラル。その姿はとても愛らしい。

同時にカジノでもハイリスク・ハイリターンな行為を好んだ忍者の姿が後ろに透けて見える。思わず笑いたくなるが、それは「アインズ・ウール・ゴウン」がすることではない。そこに一抹の寂しさを覚えつつも、ナーベラルの手を優しくとる。

「ああ、楽しませてもらう。お前たちも参加しなさい。ディーラーはこちらで準備する。チップは各自200枚からスタートだ。相手がわたしであろうと接待はいらん。遠慮なくかかってこい。これは命令だ。最優秀者にはそうだな……」

正直いうとポーカやバカラあたりはルールの記憶が既に危うい。ボロが出るかもしれないが、アインズはそれでもこの場を楽しみたかった。

「……アルベドをねじ伏せてでも望む褒美をなんでもくれてやる。もし思いつかないならば、受け取る事を躊躇うような褒美にもこちらには心当たりがあるからそちらにしよう。」

もし褒美を躊躇するならば階層守護者に渡したように、彼女らの造物主が遺していった宝を宝物殿からもつてこよう。七姉妹たちは困ブレイクデス惑し、お互いを見合い……決意が固まったのか、その目に炎を宿した。

普段のアインズならばあり得ない言葉に、本気の意味を感じたのだろう。アインズだって取り返しのつかない言葉を言ってしまった自覚はある。それでも過去の仲間たちとの思い出の場で燃えない勝負をするよりましだ。

なにしろアインズは、とてもワガママな男なのだから。

## オーバーロード★超々小噺集

● アイNZは偶然廊下でルプスレギナとすれ違った。

「ルプスレギナ、カルネ村に変わりはないか？」

「はい、アイNZ様へご報告する事象は御座いません。」

「そうか、保護すべき4人以外についてはどうだ。特にドワーフの労働力は貴重だぞ。」

「そうですね。ドワーフと言えば、5日ほど前に一人が酒に酔って井戸に落ちておりました。」

「今は無事なのか？」

「昨日から“助けてくれ”と言わなくなったので大丈夫だと思います。」

● デミウルゴスは牧場を視察中に素敵なものを見つけた。

「おや、いい形の手袋が落ちておりますね。中身は後で取り除いておきましょう。」

● エ・ランテルで仕事終わりのドワーフ2人が酒盛りをしていた。

「生意気を言うでない若造が！」

「何を！ワシの方が長く生きておるわ！」

「ワシなどお主が赤子の頃からひげを立派に蓄えておったわ！」

「貴様の思い違いじやろう。酔い過ぎじや。」

「お客様、すみません。閉店のお時間です。お会計をお願いします。」

「……若輩者たるワシが支払うわけにはいきませんな。是非人生の先達たる貴方様が。」

●

ラナーとクライムは幻術を駆使して人間を偽り、エ・ランテルを散歩していた。

「ラナー様、何度かご一緒させて頂いた喫茶店が閉店しておりますね。」

「あら本当ね。」

「味も良く、なによりすごく優しくしていただいたのですが。」

「隣にもっと繁盛しているお店が出来たみたい。残念だね。」

「女主人さんと娘さんも引越されたのでしょうか。会えなくなる前に挨拶くらいしておきたかったです。」

「大丈夫よ。わたしが済ませておいたから。」

●

アインズは宝物殿から出てきた転移で文章設定が具現化したネタ武器の一つ【愚か者には見えない服】——どんな服かはお察し——を手に？していた。

「いやはや！父上にお似合いとなるであろう素晴らしい服です！」

「そうだな、特にそのくく……色などが素晴らしい！」

「しかし普段父上を世話する一般メイドの能力では見えないであろうことが残念です。」

「あ〜。なら着る事が出来ないな。実に。実に残念だ。」

「ご安心下さい！データ量はやや少ないですが試作品が4着御座います。メイドたちでしたら1日も試着すればどのように父上を彩れるか理解できるでしょう。」

●

アインズは製作者で友人の鳥人間を脳内で怒鳴りながら、提案を即行で否定した。

●

バハルス帝国情報省の機密文書が火災によって全て焼け焦げてしまった。幸いにも死者はいなかったが文官たちが鮮血帝の肅清に恐

れ戦く中、1時間もせず魔導国魔導王から一通の手紙と封筒が届いた。

『親愛なるシルクニフ殿へ 機密資料が焼けたとお聞きしたので、コピーを送る。他にも必要な資料があれば遠慮なく申し出て欲しい。』

封筒には焼けたものと寸分たがわぬ機密資料が入っていた。

## 宝物殿での父と子

宝物殿の談話室。護衛の八枝刀（エイトエッジ・アサシン）の暗殺蟲や当番のメイドを身の回りから外し、アインズが素に近い言動をとれる数少ない場所であり、  
“私室で思索に耽りたい” という言い訳を連発しすぎたときは大体ここで精神を休ませている。

とはいえここには……

「如何なされました!? 父上!」

パンドラズ（動・黒・歴・史）・アクターが居るといふ最大の難点があるのだが。

「いや、何でも無い。思索に耽るので静かにしろ。」

——アインズはパンドラズ・アクターを改めて横目で眺め、ガツクリと項垂れる。何しろこの鬱陶しいほどのハイテンションや痛々しいポーキングの全ては自分が創り出した設定なのだから。

「ほら、モモンガさん小学校卒業して、社会人2年目みたいですから。」

まだユグドラシルの新参だった時分、かつての仲間の言葉が想起される。何を言っているのか当時は理解出来なかったが、恐らくは自分が今パンドラズ・アクターに抱いている感情と同じようなものを周りに与える行動をしていたのだろう。そう考えるとじわじわと羞恥心が込み上げ、沈静化される。

（しようがないじゃないか!あの頃はカッコいいと思っていたんだもの!……実際軍服は今でもカッコいいと思うし。）

〈記憶操作〉で自分の記憶を改竄出来ないだろうかと現実逃避まですしてしまうが、こればかりは受け入れるしかない。自画自賛となつてしまうが、アインズに大幅な精神的ダメージを与える事以外は優秀で得難い人材であることは確かだ。

……ふと、アインズはいくつかの実験を思いつく。

「パンドラズ・アクター。モモンに変身しろ。」

「かしこまりました!!」

敬礼こそしないが歌劇学生のようなオーバーリアクションの後、グニャグニャと姿が変わり、真紅のマントを靡かせ、金と紫の紋様が

入った漆黒に輝く全身鎧で身を包んだ巨軀が漆黒の双剣を構えて現れる。

「幻術を用いず、兜ヘルムを外してみろ。」

命令が実行され素顔が晒される。そこには見慣れた三つ穴の埴輪顔があつた。

（そうそう、パンドラズ・アクターは一度俺になつて〈完璧なる戦士〉パーフェクト・ウォリアーを発動しなくても最初から“モモン”になれるんだよな。……なら。）

「パンドラズ・アクター、“血の狂乱”を発動させたシャルティアに変身しろ。」

「意見具申を失礼いたします。父上！その変化は現時点でストックに入っておらず、またこの宝物殿で変化した場合、自分で制御が行えない可能性が高く、至高の御方々の秘宝を破壊してしまう恐れが御座います。」

「ふむ。では問いを変えよう。条件が揃えば変身は出来るのか？」

「最初から“血の狂乱”を発動させた状態で変身出来るかは不明ですが、こちらは条件を整えた上ですので不可能だったとしても、シャルティア嬢が行うより容易に“血の狂乱”の発動が可能であるかと愚考いたします。」

（自分で造つておいてなんだが、相変わらずめちやくちやだなこいつは。）

とはいえパンドラズ・アクターが万能かというところでもない。例えばパンドラズ・アクターは「たち・み」の姿に変身出来るが、公式チートと名高い〈世界級チャンピオン〉ワールドの職業レベルまでは模倣出来ない。

だがナザリックが転移したことで様々な変化が起こっている現在、アインズでさえ知らない能力や使い道を秘めている可能性がある。未知は最大の敵だ。

特にこの世界ではユグドラシルにはなかった職業クラスや、ユグドラシルとは違う習得方法が見られ、中でも〈武技〉タレント〈生まれながらの異能〉トという能力は無視できない。

まあそれらの実験はおいおいやるとして、今は一室で出来る実験だ。

「ではパンドラス・アクター。最近ナザリックへやってきたあの頭のおかしい女に変身しろ。」

グニヤグニヤと再度姿が変わり、後ろに小悪魔の羽を持った金髪の少女に変身し、アインズへ宝石の様な笑顔を向け見事なカーテシーで挨拶をした。

「……人間だった頃に変化できるか？」

「小悪魔であるという種族レベルまでは戻すことができないのです。申し訳ございません。」

「ほう。では……」

段々と面白くなってきたアインズは、パンドラス・アクターに次々と変身を命じていく。ストックに上限があるので、すぐに会いに行けるナザリックの面々が主だが、階層守護者や領域守護者、プレイヤーアデスやペストーニヤやエクレア、料理長や副料理長、果てはPOPするアンデッドまで……

「申し訳ございません。父上、そろそろMPが尽きかけております。」

「うむ。無茶をさせたな。褒美を取らせる、何か考えておけ。」

「幸甚の至りに御座います。……そう言えば父上、ああ。」

パンドラス・アクターが一礼した時には既にアインズの姿はそこになかった。

「まあ父上でしたらとつくにお気づきでしょう。無粋な真似をすることでした。」

そのままパンドラス・アクターは至高の御方々の遺された秘宝に触れるべく鼻歌交じりに歩み出す。

「ハムスケ嬢に変身した際、わたくしがまさか父上の叡智を以ってしても謎に包まれる〈武技〉を扱えるとは！ 外の世界にも興味が出てきましたね。デミウルゴス殿やラナー嬢へ色々聞いてみましょうか。」

## メイドたちの考察

「あら？インクリメント。本も持たずに食事をしているなんて珍しいわね。」

シクススはプレートから溢れんばかりのオムレツ、カリカリベーコン、腸詰、トリプルチーズに本日のスープを手に持ち、普段ならば静かに読書をしながら食事をしているインクリメントが他の一般メイド——それも派閥を超えたみんながインクリメントを中心に集まっているのも珍しい——と話をしている様子に思わず声をかける。

「あ、シクスス。おはよう。昨日はアインズ様当番だったのだけれど、アインズ様が不敬ながらわたしの頭では理解できないお言葉を仰っていたのでみんなに相談していたの。」

「へえ、興味深い話ね。わたしにも聞かせてもらえる？」

シクススは空いている席に座り、智謀の王たるアインズ様がどのような御言葉を仰っていたのか食事が冷めるのも気にせずインクリメントに顔を向けた。

「えっと……。あ、マズい4時だ」と。アインズ様にしては珍しく、少し切迫されたご様子だったわ。他のみんなにも聞いたのだけれど、早朝3時〜5時の間に同じことをお聞きしたメイドが何人かいるみたいなの。」

……そのセリフに似た言葉はシクススも聞いたことはある。しかしシクススの場合「忘れてくれ」とご命令を受けたので、自分も聞いたとはいふ事が出来ない。

インクリメントがアインズ様のご命令に反する事などありえないだろうが、不公平に感じてしまい思わず顔に不満が出そうになる。

「アインズ様はそのあと何と仰っていたの？」

「えっと……。何でもない。」と咳払いをされ、再び読書に戻られていたわ。」

なるほど、それならば今インクリメントが話している事はアインズ様のご命令に反する事にはならない。しかし「忘れるようご命令を受けたメイド」は自分だけなのだろうか？確認すると同じ事を聞いたと

公言しているメイドは3人ほど。中にはシクススのように「忘れるよ  
う」又は「他言無用」のご命令を受けて話ずに話せない者もいるので  
はないかと考えた。

「早朝の3時〜5時の間というのは、アインズ様にとって何か……そ  
れこそ至高の御方々の交わされた御休徴みしるしとなる御時間だったのかし  
ら？」

だとすれば自分たちが今このように考えていること自体不敬だが、  
アインズ様は常々「自分で考えること」の重要性を説いておられる。  
ならばこれは自分たちへの試練かもしれない。

……とはいえ。

「う〜ん」

答えなんて早々簡単に出るはずがない。

「そうだ！以前へロへロ様の遺された文書の中に、〃せめて5時まで  
眠れたら、時間が無い〃と綴られたものがあつたわ！」

「へロへロ様は古き漆黒エルダー・ブラック・ウーズの粘体であられるわ。睡眠を必要とされない  
でしょう？」

「そうなのよね。であれば〃睡眠〃とは何かの隠語と考えるべきよ。  
でも〃睡眠〃そして〃時間が無い〃というのはまさか……。」

御隠れになった自らの造物主様にして神を思う。想像するのも恐  
ろしい最悪の想定が脳裏に浮かぶ。へロへロ様やホワイトブリム様、  
ク・ドウ・グラーズ様がナザリックを去った理由は自分たちに解るは  
ずはない。しかし今の話を組み立てると、認めたくない事実が浮かん  
でくる。崩御なされたという救済の無い現実だ。

至高の41人の一柱たる御方がありえないと否定したいが、一番可  
能性が高い。普段は喧騒に包まれている食堂に静寂が走る。

「アインズ様が早朝の時間を気にされていたのはまさか……。」

去られた至高の御方々を見送られた、看取られた時間だったのでは  
ないか。シクススと同じ結論に至った者が何名か居たのか、嗚咽の声  
があちらこちらで聞こえ始める。

「アインズ様……なんと御劳しい。それでもわたくしたちの為に  
……。」

メイドたちは自分たちのためナザリックへ残ってくれた慈悲深くお優しい主にますますの尊敬を募らせる。

「……いつまでも悲嘆にくれている場合ではないわ！アインズ様へ出来ることを一切の失態なく。わたしたちは栄えあるナザリックのメイドなのですから！」

誰が言った言葉だろう。しかし食堂に集まる一般メイドの総意だった。唯一従うことの許された至高の御方へ万全な奉仕が行えるよう食事が始まる。

## 御方からのなぞなぞ

デミウルゴスはナザリツクの廊下を機嫌よく、無作法にならないように歩いていた。

「やあセバス、今日は愛しい人間を連れていないのだね。」

普段ならば最低な一日の始まりだと不機嫌になるところだが、今は猛禽類のような瞳に睨まれてもそよ風を浴びるが如くだ。

「ええ、ツアレは既にメイド主任としてアインズ様のため働いております。デミウルゴスほど多忙では御座いませんが、人間にしては及第点かと。」

隙あらばツアレを牧場へ連れて見学させようとする自分への牽制だろう。その眼光は益々鋭くなる。

「そうかい。ならいいのだが……。ところでセバス、 $6 \times 7$ は解けるかな?。」

自分を馬鹿にされたと感じたのか、それとも裏に何か罠があるとも思ったのか、セバスは返答を探している。しかし考えるほど術中に嵌まると考えたらしく……

「42でしようか?それが何か?。」

「いやいや、そうだねセバスでも即座に解けるほど簡単な四則演算だ。しかしアインズ様は逡巡されていた。」

セバスの目が見開く、デミウルゴスは嫌味をいうが、口には出さなだけでシャルティアやツアレにすら解ける問題だろう。

「そんなはずは……。」

「いいや、本当の話さ。しかしセバスはどのように42と導いたかな?まさか九九の暗記ではないよね。それとも6人に7つのリングでも渡したかな?。」

「何を仰りたいのですかな?。」

「アインズ様がわざわざ簡単な四則演算を思考した理由について、セバスは解るかと思ってるね。」

セバスの顔が不快感と不甲斐なさを孕んだ顔に歪む。その深遠なる理由に届かない自分を呪っている顔であるが、デミウルゴスに回答

を聞くに聞けないと言った表情だ。心をへし折る清々しい気分が満足を覚える。

「いやはや今日は良い朝だ。お互いアインズ様のため仕事に励もうか。」

セバスの肩を軽く叩き、デミウルゴスの御身に尽くせる最高の一日がはじまった。



ナザリック第9階層執務室で、アインズは「ひたすら意味不明な書類に判子を押し続ける」という、おそらく世界一簡単で、この世界で最も影響がある仕事に従事していた。

本来ならば皆が懸命に執筆した書類なのだ、目を通してやりたいのだが……

（何を書いているのか相変わらずサツパリ解らん……。そもそも日本語なのか？半分以上の書類、漢字すら読めないぞ？）

アインズは既に幾多もの現地言語を習得しているアルベドやデミウルゴス、パンドラとは頭の出来が悪い意味で違うのだ。

とりあえず最低限読めるように「ナザリックの言語こそ美しい」と苦しい言い訳をして、日本語で書類を提出してもらっているが、流石に「漢字にフリガナを振ってくれ」とまでは言えないし、そもそも漢字の意味を理解出来ないので無駄なことだ。

書類に添付されている統計やグラフについても同じだ。簡単な四則演算や九九ならギリギリ何とかなるが、微分だの積分だの、楕円曲線だの、トポロジーだのゲーム理論だの言われても訳がわからない。そもそも社会人になってから計算などコンピュータ任せだったので、実際は九九すら危うい。実際、先ほど「 $6 \times 7$ 」がすぐに出て来ず、報告のため横にいたデミウルゴスに計算している独り言が聞こえてしまった。

内心が冷や汗にぬれたが、デミウルゴスは何を勘違いしたのやら一瞬思考し……

「使用する解法を整数のみとし、回答を36〜47の自然数内と定義させて頂きます。37. 41. 43. 47は素数のため除外致します。5の倍数であるため40. 45もあり得ないでしょう。38. 39. 46については半素数であり6以外の不足数であるため、6を用いた積の回答に不適切で、可能性を排除致します。となると、42か44となりますが、44は回文数であり、7を用いた積で回文数となる自然数は77を待たねばなりません。残るは42であるかと。」

なんていうトンでも理論が飛び出し、主から至極簡単ななぞなぞ遊びを出され、「合っているでしょうか?」と言いたげに尻尾を振り喜んでいる様子のデミウルゴスには「うむ、正解だ。」と鷹揚に頷いて答えるしかなかった。

「正解に至る道は一つでないと言うことですね! わたくし感服致しました。」と何故か跪かれた。

(何であんなに頭が回るのに俺の虚像を見破れないの!?! イジメなの!?)

アインズは何度覚えたか解らない理不尽に困惑し、思わずハンコを強く押しすぎてしまった。

……ナザリック内でしばらくの間、「簡単な一桁の掛け算の解法」が流行したのはアインズの耳には届かない話だった。

## オーバーロード★超々小噺集 ②

「もしアインズ様がドラツカーの『マネジメント』を読んだら。」

アインズは自らの寝室で「本日のアインズ様当番」メイドが見守る中読書を行っていた。数あるハウツー本の中で「これならNPCの前で読んでも良さそうだ。」と思え持ってきたものなのだが……

・なぜ組織が必要なのか？

(皆声を揃えて俺のためというだろうな。)

・企業は誰のためにあるか？

(これも皆声をそろえて俺のためって言うだろうな。)

・企業の目標は？

(世界征服……いやいや、何でこうなった。)

・企業にとって価値とは何か？

(俺にとつては思い出の結晶。じゃあNPCにとつては……。)

「……リユミエール。お前にとつてナザリックの価値とは何だ？」

アインズの問いにリユミエールの目が大きく見開き、わなわなと震えだす。

「あ、アインズ様。申し訳ございません。あまりにも畏れ多い質問であり、わたくし如きがお答えするなど不敬にあたるかと愚考いたしました!!」

「いや、すまん！恐怖を抱かせる目的はなかった。今の話は忘れてくれ。」

「畏まりました。」

リユミエールはそう言うも、未だ悪寒が抜けない様子でカタカタと震えている。

(他は……難しい用語ばかりでサツパリ解らないな。イノベーションって何だ？やはり【出来る上司の5原則】とかそういうのがいいな。次に寝室で読む本はどうしようか。)

アインズは考えるのを止め、朝方まで読書のふりを続けていた。

「なるほど……。そういうことでありんすか。」

シャルティアは臣下の礼をとったまま、吸血鬼特有の牙のような純白の歯を光らせる。

「……シャルティアく。何してんの？」

「あわわわわ！ち、チビ助！何故ここに!？」

「いや、回覧板持ってきたただけ……。今の何？デミウルゴスの真似？」

「解っていて聞くのは無礼でありんす！アインズ様の深淵なる御考えに届いた際の練習でありんす！」

「あのさく。やってて虚しくならないのそれ？」

「うっさい！形から入る事も重要だとアインズ様も仰っていたでありんしょう!？」

「……そういう意味じゃないと思うけれどね。でも少しでもアインズ様の深淵なる御考えに届く方法なら前にデミウルゴスが教えてくれたよ。」

「マジでありんすか!？」

「かなり覚悟が必要だけれど、わたしは頑張ってるな。もちろんマレも。」

「その方法を教えなんし！」

「どんなことでもする？」

「もちろん！アインズ様の深淵なる御考えに届くならば！」

「勉強なさい。」

アウラはそう言って回覧板でシャルティアの頭を軽く叩いた。

正しく間違えるために

「シャルティアく。入るよお……おお？」

アウラはシャルティアの私室に入るなり、部屋を間違えたかと狼狽ろうばいした。そこには何時もの漆黒のポールガウン、フリルとリボンの付いたボレロカーディガンを羽織った見慣れた姿はなく、エントマやオーレオール・オメガにも似た「ワフク」なる衣装をまとい銀髪を麗しく結ったシャルティアが居たためだ。

「あい、アウラでござんしたか。まっことおおなんぎだんしえ。」  
「どうしたのシャルティア!? 悪いものでも食べた!？」

アウラはシャルティアに問い詰めるよう大声を張り上げる。元々黙っていれば芙蓉ふようの顔かんほせといった表現が似合う彼女だが、その言動は本当に高貴な妃様きさまといった様相だ。

「チビ助！失礼な事をいうでありん……ごほん。アインズ様が仰っておりんした。〃正しく間違えるには正解を知らねばならない〃と。故にわらわ……じゃない、わっちは本当の廓言葉くわくごんげを習い、〃正解を知ったうえで間違える〃重要性を学んでござんす。」

シャルティアがアウラにとっての神、ぶくぶく茶釜様の弟君であるペロロンチーノ様より〃そうあれかし〃と賜った言葉使いについては知っている。ただそれは〃間違った廓言葉〃という知識だけのものであり、〃じゃあ正しい廓言葉ってなに?〃と問われれば、アウラには解らない。いや……

「その気持ちは大事だけどさく。本当に合ってるのそれ?」

正しい廓言葉など、この地に残られた唯一の至高の御方たるアインズ様以外解らないのではないだろうか。

「わっちもそう思いんしいえ、アインズ様にお助けおがみ〃特別に〃至高の御方々の遺したもう数多の芸事にまつわる宝物の知識を賜ってござんす。」

何だかやけに芝居掛った一挙手一投足をみるに、アウラは誰から〃正しい廓言葉〃を習ったのか察する。確かに古今東西の芸事に関し、至高の41人たる神々を除けばナザリックで右に出る者はいないだ

ろうが……

「なんかパンドラと喋ってるみたいでムズムズするく〜。」

アウラはシャルティアに呆れた細目を向けながら率直な感想を述べた。その効果は激烈で、いままでの嫺たおやかな様子は何処へやら……。見知ったシャルティアが顔を出す。

「な、なんかその言い方は卑怯でありんす！……じゃなく、卑怯にささんしよ！さてはわらわに嫉妬しているでありんすね！お座敷でわらわが舞を披露し共に小唄を歌い、夜見世の番でわらわはついに初夜を迎え……やがてはアインズ様より懸想文ラブレターを賜り……」

「ストップストップ！もう化けの皮剥がれてるし！」

「あー！……だってこの喋り方疲れるでありんす！10秒以上やってたら頭がパンクしそうになるでありんす！チビ助！何かいい方法を一緒に考えるでありんすよ！」

「……もう勝手にしなんし。」

## クライムとラナー様の心理戦      s i d e : ラナー様

「どうしたのクライム？ ゆっくり焦らず選んでいいのよ。」

「はい！ 申し訳ございません、しばしお待ちせ致します！」

全身から滝の様な汗を流しているクライムを微笑ましく眺めつつ、ラナーは2枚の手札に目を落とす。片方はスペードの8、片方は「ジョーカー」と呼ばれる嘲笑する道化師のカード。

ラナーとクライムはお互いテーブルの対面に座り、【交互に相手の手札から1枚選び絵札を合わせていき、最後にジョーカーを持つている人が負け】というゲームで遊んでいた。

可愛い子犬は自分の一挙手一投足を様々な視点から読み取ろうとしている。しかしラナーからすれば、任意のカードを選ばせるなど赤子の手を捻るよりも容易いことだ。

「これにしますー！」

クライムはラナーが持つ2枚のカードの内、1枚を選んで目を伏せながら恐る恐る内心祈りを捧げ、選んだカードを見た。……当然クライムが選択したのはスペードの8、何の変哲もないトランプの絵柄が、クライムには嘲笑する道化師のカードよりも不吉に見えている事だろう。何しろこのゲームの勝者は敗者に対し……

「そ、揃ってしま……揃いました。ラナー様。」

「あら、またジョーカーがわたしに残ってしまったわ。わたしが【罰ゲーム】ね。」

……【罰ゲーム】という名目で、本来のクライムならば絶対にしないであろう行為の数々を行わせているのだから。

「いけませんラナー様！ もう3度目になってしまいます！ 次はわたくしが！」

クライムは限界とばかりに声を張り上げる。慌てふためくクライムの姿というのも実に愛おしい。

「ダメ。勝負で決まったこと」なんだから結果は絶対よ。あーあ、次は勝てると思ったのに。」

もちろんラナーが負けたのはわざとだ。1度目の敗北ではいつも

頑張っているクライムに慰労も兼ねて肩のマッサージをし、2度目の勝利では「10分間椅子に座っている勝者を敗者が床に座り団扇で扇ぐ」という従者と主があべこべになり倒錯感に混乱するクライムの瞳を堪能した。

可愛いクライムは次こそは絶対に負けなければならぬと、健気にもそれこそ戦闘を行う心持でラナーとの「勝負」に挑んだのだろう。だが、結果は勝利と言う名の大敗。まるで生殺与奪を懸けた実戦で敗北を喫したかのような瞳を浮かべるクライムの様子にゾクゾクと快感を覚える。

「また負けちゃったわ。次はどんな【罰ゲーム】かしら。」

ラナー様は少し拗ねた演技をしながらも、楽し気な笑顔を浮かべ【罰ゲーム】の内容が記されたカードの入っている白い箱に手を伸ばす。……これもランダムに混ぜているが、ラナーの頭脳ならばどのカードがどの場所に動いたかの計算など、3つの数字を暗記し逆唱するようなものだ。

クライムはラナーの負担にならない【カード】が引かれるよう祈りを捧げる様子。……残念ながらこれから選ぶカードはその真逆だが。「えっと……。【負けた人が勝った人に10分間ベッドの上でくすぐられる】ですって。」

クライムはあまりの恐れ多さに卒倒しそうになっている。この愛しい犬は何度自分と逢瀬を重ねようが、その純粋さに一切陰りが見られない。脳内はさぞ大混乱に陥っていることだろう。

「【罰ゲーム】なら仕方ないわね。じゃあクライム。遠慮せずに……。」  
そう言つてラナーはベッドに移動し、休日故いつもよりも簡素なドレスをはだけさせ、はしたなくなならない程度に、それでいて扇情的に身体の「最低限」だけを隠す姿となる。

「は、はい。ラナー様!!」

全身を真っ赤に染めた可愛い犬は脳内で様々な言い訳をしていることだろう。クライムもベッドに移動し、ラナーの身体に指を這わせる。

「ん、ああ。」

筆舌に尽くしがたい快感がラナーの全身に巡る。くすぐるというよりも、優しい優しい羽のような指使いは恐れ多さが先行したためだろうか。我慢できず小さく嬌声をあげてしまう。「罰ゲーム」の紙には丁寧に「何処をくすぐるか」の指南も記したはずだ。

首筋から脇、横腹、大腿の付け根、太もも……。クライムは「カード」に指南された通りに指をすべらせる。「人をくすぐる」なんてしたことのないクライムはそのままフェザータッチの要領でラナーの身体に指を這わせていく。

自分で考えておいてなんだが、これは思った以上に破壊力がある。ラナーは予想を超える快感に身体を大きくくねらせ、嬌声はどんどん増していき、自らの指を噛み声を抑えようとしてしまう。

そんな自分の姿にクライムの脳内も倒錯感と獣欲に溢れているのか、自然と息が荒くなっていく。その様子がラナーの快感に拍車をかける。

これほど早い10分は初めてかもしれない。ラナーは10分なんて言わず1時間とでも記しておけばよかったと後悔する……。

ジリジリという刻み時計の音が鳴り響く。クライムは息も絶え絶えに、慌てふためきラナーの身体から指を離れた。ラナーはその様子を残念に思いつつも、未だ乱れている呼吸を整える。一通り頭を冷やし、ベッドの上で大きく深呼吸を行い……。

「次こそは負けないわよ！ さあクライム。テーブルに戻りましょう。」

「まだこのゲームは終わらせない」と内心決意を新たにしながら、  
「次こそ絶対に負けなければならい!!」と切迫しているクライムの瞳を眺める。……安心していい。次はちゃんと負けさせてあげるつもりだ。そしてゲームが始まり……

「やっとなつて勝てたわー！ じゃあクライムが罰ゲームね！」

ラナーは無邪気に勝利を喜ぶ。クライムはようやく負けられた安堵からか、肩を大きく落とした。……これから本番だとも知らずに。そしてルールに従って「罰ゲーム」のカードが入った箱から一枚を引き……クライムは顔面から血の気を失った様子で無言のまま、ラナーが選ばせた「カードを見せる。」

【負けた人が勝った人に10分間ベッドの上でくすぐられる】

先ほどカードを戻す際、クライムがこのカードを引くよう計算をしておいた。まさか先ほど自分が行った行為のお返しを食らうとは思っていなかっただろう。ラナーは内心クスクスと笑う。

「あら、じゃあクライムにはさつきの仕事しをしなくちゃ。」

無邪気に笑う演技を行い、ラナーは白魚のようにきめ細かな美しい十指を蠢かせる。さて、どこからくすぐってあげようか。最初は焦らそうか？それともいきなり“粗相”をしでかすような刺激を与えてやろうか？ああ、なんて贅沢で幸せな悩みなのだろう。

「さあクライム。ベッドに寝て頂戴。」

クライムは拷問官にこれからの顛末を告げられたような絶望的な表情を見せている。そうしてラナーにとってはこれ以上ない愛しい愛しい犬の【躰】が、クライムにとっては地獄のような……枚挙に暇の無い失態の数々に、後に思い出すことも憚られる10分間が始まるうとしていた。

## 遺跡の散歩

「ふむ。まあこんなものでしょうか。」

デミウルゴスは屍山血河と化していた瓦礫の廃墟、旧リ・エステイーゼ王国跡地を見回り満足げに頷いていた。アインズ様のご命令により、自身の守護階層にいる部下【紅蓮】の能力で生血は蒸発し、下等種も一部を除いて全て灰燼に帰した。これで疫病が蔓延することはないだろう。

しかし御計画を立てたアインズ様のためにも、デミウルゴスの嗜好としても、ただの瓦礫とするのはあまりにも趣が無い。

“かつてここには偉大な国が確かに存在した”という痕跡を残さなければならぬ。そうすることでどのような大国さえも、アインズ様へ首を垂れぬ愚者は同じ末路を辿ると示唆させる事が出来る。

そのため物陰に隠れ母親に抱かれた子供と母の白骨、我先に逃げ惑い将棋倒しとなって屍山となった白骨の山、絶望のあまり一家心中を決めた小ささまざまな白骨、火事場泥棒をしようとしたのか商会の金庫に入りそのまま出られなくなった愚者中の愚者の白骨などは灰にせず、あえてそのまま残している。

リ・エステイーゼ王国跡地は既に【遺跡】と呼んでもいいだろう。ナザリックに逆らう者がどのような末路を辿るか”という事実を記した歴史的な遺跡として万年という単位で語り継ぐことが出来る。デミウルゴスはその出来栄えに満足しながら、【遺跡】のひとつひとつを歩いていた。

「……っ。」

そんな中、デミウルゴスはひとつの白骨を発見し不快気に眉を一瞬吊り上げた。

それは綺麗なほど真っ二つに……唐竹割にされた奇妙な白骨だった。恐らくはナザリックが進行した軍の誰かに頭のとっぺんから股先までを切り捨てられたのだろう。武器を持っていないのは紅蓮が焼き尽くしてしまったからだろうが、白骨の手の握りから剣かこん棒らしき武器を振るおうとしていた痕跡が見て取れる。

愚かしい。実に愚かしい。強大な力を前に、群衆でもなく突出した能力もない個に何が出来ると言うのだ。こんなものは、ただの自己満足だ。己の不遇や絶望に対し勇ましく呐喊し最期を迎えたという最期の自慰行為でしかない。そんなことをしても結末も未来も世界の理も<sup>ことわり</sup>変わらない。不愉快極まる、見ていられない。

……見ていられない？デミウルゴスは自分の内心に去来した不可思議な感情に疑問を覚えた。

この白骨が残っているのは自分が紅蓮に「無謀にも栄えある魔導国……延いてはナザリックへ反抗しようとした愚者」の痕跡を残すよう命令したからに他ならない。実際いくつかそのような白骨は残っていたが、追い詰められて窮鼠が獅子を噛もうとするように無謀な突撃を行った白骨ばかり。

この者のように、目に見えて立ち向かってきた痕跡は見つからずにいる。デミウルゴスは自分の内心に渦巻く感情を持て余す。いつそのこと地獄の炎をもって灰すら残さず燃やし尽くしてしまいたい。足で踏みつけ粉々にしてやってもいい。

「全くもって不愉快です。気味が悪い。」

しかしデミウルゴスは内心に浮かぶ奇妙な心模様を翻弄されたまま、白骨を放置し【遺跡】を歩み始めた。

花があつたならば手向<sup>たむ</sup>けてやりたい……。そんな一瞬浮かんだ悪魔にあるまじき内心から目を背けるように。

## アインズ様のことわざ勉強

今日も今日とてデミウルゴスやアルベドから理解不能な報告を受け、書類にひたすらハンコを押し続ける執務を終え、本日のアインズ様当番が見守る——監視されているようにしか思えないのだが——中、アインズは寝室で読書を行っていた。

いつもは読んでも知識が右から左に流れるような小難しい本を読んで支配者然としたポーズをとるのだが、本日アインズが選んだのは転移の初期にあつめた現地の歴史書、ことわざ諺に関する翻訳本であった。……それでも流し読みが限界なのだが。

（この本なら『現地の歴史をより深く探るため』ってアピールも出来るし、支配者風カッコいい台詞集に使えるものもあるかもしれないからな。）

脳裏に守護者たちの前で知ったかぶりをして諺——愚者は経験より学び、賢者は歴史より学ぶ——の半分も出てこなかった苦い記憶が蘇る。

あの時はデミウルゴスが見事に勘違いをしてくれて結果『諸君、我々は歴史を作りあげる』というなんとも守護者たちの脳内アインズらしい結論に落ち着いたが、いつボロが出るかわからない。

それに郷に入つては郷に従えともいう——これも最近覚えた——。ナザリックのNPCたちがアインズより優秀であることに疑いは無いが、それはユグドラシルという世界の知識に偏ったもの。NPCではないプレイヤーであったアインズならはの気づきもあるかもしれない。

そうしてアインズは現地の諺が記された書物のページをゆっくりと開いた。

【亜人は神を恐れないが、神を信じる人間を恐れる】

（これは何だかうっすら聞いたことがあるな。ぷにと萌えさんだったか？ 亜人の代わりに入っていた言葉が……赤い人？ え、赤い人って何だっけ？ 兎に角まあ……熱心すぎる者はヤバイってことだな。）

この言葉はともすれば、この世界でアインズが一番身を以って知っ

ているかもしれない。アインズの脳裏にNPCたちとあの目つきの悪い少女が一瞬過った。

アインズは感じるはずもない頭痛を覚えながら次のページを捲った。

【石を舞わせて木の葉を沈める】

（道理を無視して無茶苦茶なことをする……か。ちよつと俺の手に負えない話の時使えそうだな。「諸君の意見を嬉しく思う、しかしわたしは石を舞わせて木の葉を沈める真似は好まないな」あ！結構いい感じ！）

段々と楽しくなってきたアインズは軽快にページを捲る。

【吸血鬼でも血を拒む】

（直球だなあ!?汚い身なりやメタボは良くないぞつて意味なんだろうけれど、これはちよつと……ナザリックのみんなには言えないな、かなりシヨック受けるだろ。あ、逆に俺が言ったらジョークとして場が和むかも。使いどころに困るけれど、脳内にメモつとこう）

アインズは内心で苦笑をしながら、そのまま指を滑らせ……眼窩に炎にも似た光を走らせた。

【百科事典で百科事典の項目を探す】

意味は【無駄な努力】又はアインズでもふんわりと理解できる【パラドックス】と同義だ。問題はそこではない。ユグドラシル固有のアイテムの……それもポーションのように大量生産できるわけでも無い代物の名が現地で使われていることだ。

（どういうことだ？我々の以外にもユグドラシルプレイヤーが存在したことは確認済みだが、この本はナザリックが転移する前のもの……。一人一冊と考えればそこまで流通できるものでもない。いや、現地に百科事典そのものが存在するのはおかしくないが、偶然の一致と考えるにはあまりにも不確定要素が多すぎる。この本を翻訳してくれたエルダーリッチに詳しく……。いやそれだと俺が現地の言葉を理解できていないと宣言するようなものだ。）

そもそもエルダーリッチが翻訳したのならば現地の百科事典をエンサイクロペディアと訳した可能性もある。本当に現地で使われて

いた言葉なのか、それとも誤訳なのか確認する必要があるだろう。

もう【あ行】だけで手一杯となったアインズは、こんなときに仕事をしてくれない精神抑制を疎ましく思いながら次のページを捲った。その瞬間、アインズの無いはずの心臓が一瞬跳ねた気がした。

それは過去に起きた歴史的事実なのか、それとも人間の幻想なのか。もし前者だとすれば……

【終わりの神にも終わりがやってくる。】

## 技術は飛躍的に進歩すれど

眩い光が全身を包み、轟然たる大音響と共に、祈りの対価が形となって顕現する。その光景に死の支配者は情けなくも片膝をつき、血混じりのような呪詛を込めた悪態をついた。

「く、クソがあー！」

しかし自分はナザリツク地下大墳墓の絶対支配者にして死の王。ここまでできて斃れるなど出来るはずがない。再び天命に身を委ね、天命が己の味方をする瞬間を享受するため、禁断の魔法を使おうとする。しかし……。

それは終わりの宣告。死の王でも免れることの叶わない無慈悲な絶望。

次の瞬間、死の支配者はこの世の終わりとはばかりに絶叫し、そのまま地に伏せうずくまった。

「登録頂いたカードは現在ご利用出来ません。

ご利用可能額をご確認の上再度お試し下さい。」

「あああああわああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ!!!」

「モモンガさん! 今回のイベントガチャ、ハイレアドロップの排出率0.03%以下だつてニヤルちゃん測定でもやってみましたし、いろんな掲示板でも爆死勢で阿鼻叫喚ですよ! いままでにないくらい辛い仕様ですつて。」

散々ガチャで爆死していく様子を見ていたへろへろは思わずモモンガに声を掛ける。途中何度も止めたのだが、熱くなった人間を止めることは容易ではない。

「だってあの超人氣軍事美少女クエストとのコラボガチャですよ!? 歴代の史実に則った軍服! 兵器! 『ヴァルキュリアの失墜』以前のアイテムたちとは比べ物にならない品々が手に入るのは今だけなんです!」

「その結果が低レベルの金属のインゴットと軍事食レーションの山ですよね!? それにもしレアドロップ成功させたとして、魔法職のモモンガさんに銃やナイフが当たってもどうしようもないじゃないですか!」

「それらはすべてガーネットさんにプレゼントしますよ。私が欲しいのはそう!軍服!!」

「それならもう20着くらい当てているじゃないですか。」

「軍服は軍帽がセットじゃないと意味が無いのですよ!」

「運営の思うつぼ!」

「えつと……3756、4……セキュリティコードは……」

「ちよつと……?モモンガさん?」

「さあ天命よ!今こそ我に味方せよ!」

「やめてええええええええええええええええ!!」



宝物殿の談話室。護衛の八エイト肢刀エッジの暗殺蟲や当番のメイドを身の回りから外し、アインズが素に近い言動をとれる数少ない場所。

「そういうえば父上。ふと疑問に思ったのですが、本来宝物殿に仕舞われて然るべき一部の品がシズ・デルタの……失礼、ガーネット様の御部屋に置いてあるのは何故なのでしょう?他の御方々はこの宝物殿を信頼し、秘宝の全てを託しているように思えますが。」

パンドラズ・アクターはやや不快な様子でアインズに問う。パンドラズ・アクターからすれば宝物殿……ひいてはナザリック地下大墳墓や創造主であるアインズを信頼していないように思えて気分の良い話ではない。

「あ、ああ。それはえつと……。シズが「ナザリックのギミック全てを熟知する」能力があることから解るように、ガーネットさんの作製した品々とはあの部屋にあってこそ真価を発揮する。気にすることではない。」

「は!申し訳ございません。出過ぎた発言でした。」

(確かにあの部屋はなあ……。銃だレーザーだ手りゅう弾だと世界観

おかしくなるくらい何でもありだからな。そういえば昔ガーネットさんが俺の大爆死した残留品からアイテム造ってくれたことあったっけ。」

アインズは過去の愚かさに思わず内心笑みがこぼれる。過ぎ去ってしまえばそれも全て良い思い出。その後リアルで給料日まで餓死寸前に陥ったなど、美化された思い出の中には残っていない。



「あらシクスス、今日は凄く気合が入っているわね。」

「デクリメント!」

「そんな驚かないですよ。衣裳部屋のお掃除よ。そっか、明後日はアインズ様当番だったものね。」

「ええ、智謀の王たるアインズ様に御似合いとなる服を今から予習しているの。そういえばこの服はこれほどの量がありながら一度も着て頂いたことがないわね。まるで機能美の塊とも言える……」

「それはだめ!」

「え?」

「え?」

「……デクリメントどうしたの?急に?」

「解らないわ。ただ一瞬、本当に一瞬だけへロへロ様が脳裏に蘇って、何だか異様な危機感を……」

「そ、それって御方々の御神託ということ!?!ならこの服はダメね。封印しておかないといけないかしら。」

「な、なにがあったのかしら?」

デクリメントは腑に落ちない気持ちを抱えたまま、そのまま衣装室の掃除へ戻った。

まーじやんであそぼう♪

タンタンタン……タン、と牌が河へ捨てられていく音が一定のリズムを奏でて空間を支配している。3つは一寸の迷いもなく、1つは長考の後に打たれた故。麻雀卓を囲むのは起家であるデミウルゴスから時計回りに南家アルベド、西家シャルティア、北家パンドラス・アクターとなっている。場は東3局の平場。11巡目。

「こんどこそ……!!リーチでありんす!」

親であるシャルティアから立直が入ったものの、他の3人は気にする様子も無い。そのまま数巡が過ぎていく。

(シャルティアは相変わらず守備や打ち込みなど考えず、最善最速で手を作っているでしょう。河には第一打から字牌ではなく、筒子の①が捨てられている。つまり配牌でより有効な牌……④や⑤あたりを持っていった。①①①と並んでいた状態から捨てられた可能性も0ではありませんが、わたしが1枚持っていたことを考えれば可能性は低い。それに場に筒子は均等に捨てられ、萬子は極端に少なく索子が多い。そしてシャルティアの立直宣言牌は萬子の五……となると)

(……となると三三五 三四五五 と持っていた可能性が高いわね。六の萬子はわたしが3枚持っているからくつついた可能性は0ではないけれど排除しても構わない確率。三か四を頭にして見えていない七や八を使った待ちかしら。ならば六と九は捨てられないわ。リーチは自重して九萬を引いたら大人しくオリましょう。三三と他の対子を使った待ちだとしても三元牌やシャルティアの風である東はすでに切られている。ドラは筒子の⑥だからわたしが1枚持っている事を加味すればツモられる可能性は低い。筒子のドラまわり2牌か六・九萬が来るまでは押しても問題のない局面ね。)

(シャルティア殿の立直に対してデミウルゴス殿もアルベド嬢も引く気配がありませんね。アルベド嬢は字牌や端牌を捨てている典型的な断么九手、デミウルゴス殿は途中まで筒子の染手気配でしたが、萬子を抑えていますね。ならばこれは切れない。)

「くうううう！全然来てくれりやせん！」

シャルティアが悔し気にツモった萬子マンズの五を切ると……

「二」 ロン 「三」

「はいいいい!?!」

②②③③④④ ⑥⑥⑥⑦⑧ 六七

「断タン么ヤオ・平和ピンフ・一盃イーペーコー口、ドラ3。跳満だね。」

四六六六 ④⑤⑥ 3 4 4 5 5 6

「断タン么ヤオ・三色サンシヨクドウジユ同順・ドラ1 満貫ね。」

南南南 九九九 一二二二三三三 五（赤牌）

「やはり五萬が当たりでしたか。無理に高めを狙わずよかったです。

南ナン、一盃イーペーコー口、混ホン一、赤ドラ。跳満は12000点となります。ご無礼、

シャルティア嬢」

「またわらわのトビ終了でありんすか!?!これで何回……1 2 3 4 5 6

……ああああああもおおおお!」

「この遊戯は魂や血液を賭けることもある神聖なもの。至高の御方々  
の中でもウルベルト様やペロロンチーノ様が好まれたと聞く。もち  
ろん……」

「もちろん負けたまま終わるなど赦されるはずがありんせん!しかも  
この結果はアインズ様にご報告が行くのでありんしょう!?!ここから  
大逆転をみせてやるでありんす!」

「そうかい。楽しみにしているよ。」

アインズが守護者同士の交友を深めるため提案した麻雀大会。そ  
の結果はシャルティアの精神的被虐という結末で幕を下ろそうとし  
ていた。

## エルフメイドの幸せ

ダークエルフの女の子——にしか見えない男の子、マール・ベロ・フィオーレは布団の中で頭から音符が見え隠れするほど心を弾ませながら、【アッシュユール・パニバル最古図書館】で司書長にオススメされた冒険活劇の本を読みふけていた。物語ももうすぐ佳境……そんな中だった。

「マール様。こんな夜中に寝室で本を読まれますと目を悪くされますよ。それに休日とはあと8時間、いくら疲労無効のマジックアイテムをお使いといえど、業務に差し障りがでては大変です。物語は後日として本日はゆつくりとお休みください。」

「そうです。マール様にお疲れが出て方が一の事故があつては大変です！」

「え、ええー！この本だけ読み終えてから……。」

「御身体は資本です。しっかりと葉しおりを挟んで保管しておきますので、御身体をお休め下さい。」

そういつて無慈悲にマールの手から本をとりあげるのは、元々ナザリックに土足で踏み込んだゴミにも劣る賊しよゆうぶつの奴隷にして、現在インズの慈悲にて第六階層でメイドをしているエルフたち。とはいえメイドと言つてもポケットの多い丈夫な生地で作られた作業着——園芸用に作られたサイズの合うものを適当に渡した——を着用しているため、使用人という言葉が適当かもしれない。

マールもアウラも何かにつけて世話を焼こうとしてくるこの3人には辟易へきえきとしており、正直どこかに行つて欲しいのだが、さりとてアインズ様のご命令を無視して無下に扱う訳にもいかず、こうして一方的に押し付けられる善意おせっかいへの対応に頭を悩ませる日々が続いている。

「わかった、寝る。寝るから！み、皆さんも、あの、ほら、寝て下さい。夜、夜ですから！」

「いえ、マール様が休日をこの第六階層で過ごすとお聞きし、わたしたちは万全の準備をしております。ご心配下さりありがとうございます。」

マールはメイドエルフの言葉に何かを言いかけ、不貞腐れたように布団に寝そべってパタパタと足を動かす。そしてしばらく駄々つ子のような状態が続いたが、1時間もしたころには可愛らしい寝顔が月光に照らされ、マールの美貌が夜の闇に燦然と煌めいていた。

「……美しい。」

思わず吐息混じりで零れた一言は3人の内誰だったか。しかし総意であったことは間違いなく、他の2人も首が千切れんばかりに頷いている。

“自分はこの寝顔を拝謁するためにこの世に生を受けた”そんな錯覚さえしてしまうほど3人にとって幸福な時間が流れていく。しかし何事にも終わりは訪れる。

「マール様、起床の時間に御座います。入浴の準備が整っておりますので、浴室へどうぞ。」

「やー、あと5分……。」

「整容はとても大切です。マール様の美しさが陰ることなどございませんが、最近のマール様の御仕事はドルイドの能力を使ったダンジョン作成と聞き及んでおります。その玉体が土や砂塵で穢されることを思いますと、お仕事での前後で御身体を清めることは必要不可欠な事であるかと。」

「わ、わかったよお。」

「何度もいうけれど、ぬ、脱ぐことは自分で出来ますから。」

「いえ、マール様の手を煩わせるわけにはまいりません。」

「身体も自分で洗うから！せ、せめて下だけは自分で！」

「いえ、マール様の手を煩わせるわけにはまいりませんので。」

「そ、その着替えだけでも……。」

マールは言葉で心底面倒な様子で拒絶をするが、メイドエルフたちは聞こえないとばかりにテキパキと湯上りのマールに着せ付けを行う。その後マールに朝食を提供——デリバリーされたものを卓に置くのだが——し、出勤を見送る。

「マール様、本日も尊く美しく御座います。それでは、お仕事でお疲れ

のでませんように。」

「は、はい。いつてきます。」

仕事前からぐったりと疲れたマーレはそのまま指輪で転移し、第六階層からいなくなつた。その瞬間、エルフメイドたちの表情が険しいものとなり、マーレの寝室まで3人が一目瞭然に走り出す。

「やったー！今日のお布団干し係はわたし!!」

摩擦で火傷するのではないかというほどの滑り込みを見せて一人のエルフメイドが勝ち誇つたようにマーレの眠っていた布団の端を握りしめる。他の2人は苦虫を噛み潰したような表情だ。布団を勝ち取つたエルフメイドはマーレの布団を抱きしめ、そのまま大きく深呼吸をしていた。

まるで極楽に咲く蓮の蕊すいかと思わせる芳醇な良い薫りが鼻孔をいっぱいにする。

「ちよつとーマーレ様に不敬でしょう！変態じみたことしないの！」  
負け惜しみである。自分たちが布団を手にしていたら絶対に同じことをしていた。というかいつもしている。

「そういえば今日の朝食おいしそうだったわね！お魚が生で食べられるなんて初めて知つたわ。」

「きつとここが特別だからよ。元居た世界で食べたらお腹を壊すか毒に当たるわ。」

エルフの料理と言えば基本果物や野菜、そして狩りで得た肉だ。もちろん三人の好みも肉よりではあるが、ナザリックで出た食事で不満をもつたことは一度もない。

エルフメイドは基本アウラかマーレの食事と同じものが出されており——大体は世話をする事の多いマーレと同じものが多い——アウラはハンバーガーやピザなどを好んで食べるが、マーレは食に対する欲が薄いのか、ほとんどがお任せである。

「わたしたち……こんなに幸せでいいのかしら？」

脳裏に蘇るも憚はばかる奴隷だった頃の自分。『天武』エルヤー・ウズルスに穢された身体と刻み込まれた心の傷は未だ彼女たちを悩ませる。奴隷であつた凄惨な日々が終わつたように、この素晴らしい日々も終

わかってしまうのか……。想像するだけで悪寒が止まらない。

「大丈夫よ！兎に角この素晴らしい時間が終わらないよう。わたしたちはアウラ様とマーレ様に命を懸けて尽くしましょう！」

「そうね！」

そうして3人は改めて決意を固めた。……その様子を完全不可視しこっそりとみていたアウラは、“これはダメだ……”と言った様子で苦笑いしながら項垂れていた。

## 親子水入らず

ここはナザリック第9階層「スパリゾート」。

大浴場内は12のエリアに分かれていて、最も大きいのがアマゾン河をモチーフにしたジャングル風呂、情緒あふれる古代ローマ風の風呂、柚を浮かべたゆず風呂、炭酸風呂、ジェットバス、低周波が流れていて入ると体が痺れる電気風呂、炭が浮かんでいる水風呂、謎の光を放つチェレンコフ湯、そして男女混浴の露天風呂。他にサウナ、岩盤浴ができるエリア、リラクゼーションルームが完備されている。

その中でも比較的小さな浴槽でアインズは三吉で身体を洗うでもなく、ただ静かに湯舟へ浸かっていた。というのも、今回スパリゾートへ来た目的は整容でも休息でもないからだ。

「……確かにわたしは『褒美を躊躇するな』とは言ったが、本当にこれでよかったのか?」

湯浴み場という環境のせいか、はたまた相手が相手だからか、練習を重ねた支配者然とした口調ではなく素に近い声で思わず問うてしまう。アインズの前には黒穴が3つ空いた玉子のような顔に、つるりとした肌だけが光る異様の存在が一人。

「もちろんで御座います父上!親子水入らずでの入浴とはこのナザリックにおいてわたくしのみが味わうことのできる特権中の特権!恥ずかしながらわたくし、この背徳的な至福に平静を保てず居る次第です。」

「ここは風呂場だ、るし★ふぁーさんのゴーレムが暴れるから静かにしろ。」

「はっ!!申し訳(ご)いません。父上!!」

黒い眼をキラキラと光らせるパンドラズ・アクターは現在軍帽・軍服・軍靴といった装飾全てを外し、ドッベルゲンガー二重の影の身体を露あらわにしている。一切の特徴や姿かたちの無い様相は正しく異形そのものだ。

(傍から見れば骸骨とツルツルの埴輪が入浴か、さぞシユールな絵面だろうな。)

そう考えるとメイドたちが常々説いている服装や装飾の重要性と

いうのは、案外正鵠せいこくを得ているのかもしれない。自分が湯上りの浴衣姿で街を歩こうものならば、元の世界の映画で見た落ち武者や亡霊そのものだろう。

（それにしてもこいつに「お風呂が好き」なんて設定は入れていないはずだが、随分とはしゃいでいるな。褒美をとらせると言った時はてつきり「宝物殿でアイテムに触れる機会を！」とでも言うかと思っただが。）

自分で創造しておきながら、パンドラズ・アクターの考えがまるでわからない。これを「成長」と呼ぶのならばうれしい話でもあるのだが、こいつが成長したと聞いても素直に喜べないのは過去の仲間たちの面影を被せることが出来ないからか、はたまた様々な意味で成長しない己を自嘲してしまつたためか。

「さて父上、ここに居りますのは父上とわたくし、そして物言わぬゴレムのみには御座います。そこで少しばかりお話が……。」

「なんだ？機密性ならば宝物殿の方が高いと考えるが？」

パンドラズ・アクターは耳打ちをするような所作でアインズへ迫るが、オーバリアクションな上、声のポリウムもそのままなのでまったく動作の意味をなしていない。とはいえアルベドやデミウルゴスに並ぶ知者、本当に機密を要する情報ならばここで話さないだろうと言う信頼はある。ならばパンドラの私的なことだろう。

「父上は時折、まるでそこらの庶民や感情に任せる愚者であるかの様な演技をなさる事が御座います。父上の偉大なる御考えに届かぬ未熟なわたくしで御座いますが、僭越ながらわたくしは父上の影武者を拜命された身。その深淵なる御考えを是非ご教授いただきたくないのです!!」

パンドラの放った言葉の刃物がアインズの無いはずの心臓に突き刺さり、血反吐を吐くかのように咽むせこんだ。

「う、うううん。よ、よくぞ気が付いたな。流石だ。パンドラズ・アクター。わたしの種族は今更説明の必要も無いが死オーバードの支配者……アンデッドだ。故に他の種族のように疲れを知らぬ、過度な感情に任せた行動も頭では理解できるが経験は出来ぬ。しかしわたしは様々な

種族を束ねる一国の王となった。上に立つ者が臣民の心を解らぬなど失格であろう。何より恥ずかしい話だが人間種等の上に立つのは初めてでな、交渉事をするならばナザリック内のように命令だけで事が済むとは思えぬ。故に理解を深めようとあのような態度を取っていた。見苦しかったかな？」

アインズはがらんだろの脳内をフル回転させてそれっぽい理由を継ぎ接ぎしていく。

「なるほどー！そのような意図があつたのですね！わたくし、演技についてはいささか自信が御座いましたが、父上でさえより高みを目指し邁進していると聞き、己の怠惰に恥じ入るばかりです！」

「そ、そうだぞ。故にわたしやモモンの影武者をするとき、余りにも支配者然・英雄然とした演技をしすぎてはならんぞ。」

「父上の偉大さを思いますとあまりにも難しい注文に御座いますが、このパンドラズ・アクター、一層奮励努力致します!!」

なんとか乗り切った……アインズはそんな安堵から、湯舟に軽く沈んでしまう。

「なるほどー！今のように自然に脱力したかの動きですね！こうでしようか!？」

パンドラズ・アクターはそのままアインズの小市民的な動きを一挙手一投足模倣する。

「あ、いや。これは……。」

「なるほどー！これはまるで狼狽しているような口調という演技ですね!!これもまたわたくしに課せられた試練と受け取ります！父上の言動をこれからも学ばせて頂きます！」

面倒なことになった……と思つたがもう遅い。その後もパンドラズ・アクターの演技練習は留まることを知らず、アインズは自分の黒歴史が自分の見られたくない一面を模倣するという地獄にほぼ丸一日付き合わされる羽目となった。

## 印璽の値打ち

「魔導王陛下万歳!! 魔導王陛下!!」

大地に轟き、天空に達するが如き大喝采を背に、ローブル聖王国の「顔なしの伝道師」 「狂信者の女教祖」 ネイア・バラハは演説台から天幕へ戻り、付けていた奇抜な仮面を外して大きく息を吐いた。麗しい金髪に整った鼻立ち、相応に整ったスタイルを持つ彼女であるが、ただひとつの欠点により、彼女を美女と呼ぶ者はいないだろう。

またの名を「凶眼の狂信者」。裏街道を歩くような独特の目つきは悪い意味で人目を呼び、それを忌避し、ネイアは不自然であることをわかりながら仮面を付けて伝道活動を行っている。

「バラハ様、お疲れ様で御座います。冷やした水タオルを準備しておきました。よろしければご利用ください。」

「あ、ありがとうございます。」

ネイアに濡れタオルを渡すのは黒い髪を短く切ったネイア・バラハ専属の女中であり、男性であれば目が奪われる豊かな胸が特徴的だ。

「本日は魔導国より使者が訪れるというご予定でしたが、本当にバラハ様お一人の対応でよろしいのでしょうか?」

「ええ、わたくしだけで大丈夫です。アインズ様の国からいらつしやる使者なのですから……ええっと、歓迎の準備などはいらないと言われましたが鵜呑みにしていいのかな? んん?」

既にローブル聖王国において神殿勢力を呑み込み、上回る勢いを持ったネイアの会。しかし成長速度があまりにも早すぎて、国同士の作法であったり、権謀術数については門外漢な事が多く、未だに苦汁を舐めることが多いのが現状だ。今回も敬愛すべきアインズ様の国より自分の設立した団体へ使者が来ると聞いた時はあまりの衝撃に卒倒しそうになっていたほど。

「いえ、失礼は出来ませんが、余計な真似は軋轢あつれきを産むでしょう。わたしが身一つで対応いたします。」

そもそもネイアは魔導国の使者が人間なのかアンデッドなのかすら聞いていない。もし後者ならば飲食を使った歓迎は失礼というも

のだ。なにより偉大なるアインズ様の治めたる魔導国よりの使者、未だ支援物資を賜っているローブル聖王国の食事など口に来たものではないだろう。

ネイアがそんな考えをしていると、事務方を任せているベルトラン・モロが合図を送って入室し——女中は男性を忌避するため退出させた——魔導国より使者が到着したことを告げた。ネイアは覚悟を決め、自分の頬を数度叩き、屋敷で一番の貴賓室へ向かった。

「魔導王陛下よりお話は何っております。この度はローブル聖王国を真実へ導く女傑であられるネイア・バラハ様へお目にかかれ光栄に御座います。わたくしは……失礼、名は持ち合わせておりません。種族名であるエルダーリツチとお呼びください。」

「こちらこそ栄えある魔導国の使者様にお会い出来て光栄です。」

「それではこの度わたくしが訪れた理由ですが……」

ネイアにとって眼前にいる異形のエルダーリツチに恐怖心は無い。しかしその口から出てくる話はネイアの心情を怒髪天まで突き上げ、心神を摩耗させるに十分すぎるものだった。

「……つまり、リ・エステーゼ王国のバカ貴族が、アインズ様の旗印を土足で踏みにじったと。」

「そういうことです。ですので……」

「我々に出来ることは御座いますでしょうか？ 矢尽き、弓折れるまでリ・エステーゼ王国の貴族全員を血祭りにあげる準備をさせていただいてもよろしいのでしょうか？」

「あの、そういう話ではなく……」

「ああ、そのモチャラスなる貴族は生け捕りにしろということですね？ わかりました。」

「ですから違うんです。この国璽に付随の印を頂きたいのです。」

「これは……宣戦布告ですね。畏まりました。では……あ!!」

「どうかされましたか？」

「当会は恥ずかしながら国璽に付随できるほど立派な印璽を持ち合わせておりません！ 今から作成してもよろしいのでしょうか？」

「それだと捏造の疑いもかけられてしまうので……。出来れば多くに利用しているものを……。」

「え!?それだとあの……恥ずかしながら……。」

「いえ、印璽に恥も何も無いと思えますよ。」

「その……アインズ様よりご貸与頂き、お返ししたアルティメットシューティングスター・スーパ―を模したわたくし自作の印になるのですが。」

「ええ、構わないと思えます……。ローブル聖王国の国旗でもある水色のインクで捺印をいただければ。」

「アインズ様の御目にかかるのですよね!?なんとわたしは恥知らずなのでしよう!。」

ネイアは赤面し、自身のブロンドの髪をわしゃわしゃと掻きまわす。最初に印璽を作った時は自分たちがこんな大組織になるなど思っても居なかったため、アインズ様への敬意と自身の趣味を全開にして造り上げたものだ。

「いえいえ! アインズ様よりルーン武器をご貸与されたとお聞きしておりましたが、そちらを印璽にされるとは流石に御座います。全く恥ずかしがることなどございません!。」

使者として訪れたエルダーリッチは目の前の少女がアインズ様の御手により創造された【駒】であると感じ、どれほどの傑物であるかも事前の演説による下等種の狂信具合から実感はしている。だが、今日にしているのはどうみてもただの年相応な少女であり、アインズ様の深淵なる御考えに届かない自分を呪う他なかった。

## 困ったときのカルネ村

「あーあ。平和過ぎて暇つす、村滅びないっすかねえ……。」

ルプスレギナ・ベータは上空から平穏なカルネ村を視察しつつ、肩を竦めてため息を吐いた。あの何とか王子が村に攻めて来て以来、村への襲撃は無い。とはいえいと尊き御方からは、4人の人間を護る命令を下されている以上、厄介事をこちらから起こすわけにもいれない。流石に二度もアインズ様から失望されれば、アインズ様は他の至高の御方と同じく神域へお姿を隠されるかもしれない。

そうならば自分の命だけで済むとは思えないし、アインズ様が御慈悲を見せナザリックへ残って下さったとしても、ルプスレギナの命が危ない。

5000の人間達がゴブリン如きに蹂躪される様は、中々見事な滑稽劇だった。あの屈辱と絶望に染まった顔は、殺すのが勿体ないと思っただけだ。

「おお？あれは……」

ルプスレギナは遠方に気配を感じ取り、遠視鏡を目に当てる。そして顔を凶相に歪めた。

「魔獣たちの軍勢……」

久々の玩具遊び、ルプスレギナはアインズ様へ〈メッセージ伝言〉を飛ばそうとするも……

『ルプスレギナ。これから報告と、命令を下す。』

「アインズ様!」



「わざわざ闘技場まで足を運んで下さり光栄に御座います！アインズ様！」

ナザリック第六階層の闘技場に颯爽と登場した少年——のような少女、アウラ・ベラ・フィオーラは澆刺とした声でアインズ・ウール・ゴウンを出迎える。

「構わん、以前に話した実験だ。命令通りにゴブリン達を使役しているか？」

「はい！餌付けもしておりますし、名前も付けました！何度か戦地に立たせて命令も下しております！」

「よし、ではこれを改めて吹いてみよ。」

「はい。」

アウラに渡されたのは、ユグドラシルのアーティファクトアイテム〈小鬼將軍の角笛〉。低位のアイテムであり、アインズほどとなれば文字通り腐るほど持っている。

恭しくアインズから下賜された品を受け取り、アウラが角笛を吹くも、ゴブリン「ぶー」つというオモチャの様な音と共に19体の低レベルゴブリンが召喚されただけだった。

「ああ……。申し訳御座いませんアインズ様。わたしでは力不足だったようです……。」

「何、気にするな。38体のゴブリンの処遇については任せる。この実験については他言無用、勿論マーレにもだ。」

「畏まりました！アインズ様！」

アインズは内心の落胆を隠しつつ、支配者然とした様子で命令を下す。

ピーストテイマー（魔獣使いのアウラでもダメか……。指揮官のクラススキルを持つ者でも失敗。何が隠し要素なんだ？というか運営もサービス終了前にタネ明かしくらい、してくれても良かったのに。）

カルネ村に突如として現れた5000のゴブリン軍団。それはユグドラシルのベテランプレイヤーであるアインズを以って初めて見る現象であった。ユグドラシルのマジックアイテムである上、一度目は知った通りの効果を発揮した。なので、この世界に転移した影響とは考えにくい。

別に今更5000のゴブリン軍団を召喚したいとは思わないが、ユグドラシルベテランプレイヤーの矜持として、自分でも実現出来なかった未知の効果を発揮させたエンリ無課金ユーザーには若干の嫉妬心がある。そのため何度か実験を試みたが、低レベルのゴブリンが増えるだけで、謎は一向に

解決されない。

(まずへ小鬼<sup>ゴブリン</sup>將軍の角笛)って名前からして、クラススキルに指揮官や將軍<sup>ジェネラル</sup>が必須なのは間違い無い。やはりNPCじゃダメってことか？かといって俺が吹くわけにもいかないし、ハムスケでもダメだったから、人間種限定？ それとも状況も解放要素のひとつか？ うくん解らん。)

これ以上低レベルのゴブリンを量産しても仕方がない、謎は謎のまま……悔しいが、この実験はこれで終わりにしよう。

「アインズ様、いと尊き御方に足を運んで頂いた中、申し訳御座いません。別件のご報告が御座いまして。失礼ながら、お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「ああ構わん。報連相は大事だからな。」

「寛大なお心に感謝申し上げます。現在ナザリックが支配しているトブの大森林なのですが、わたしの未熟が致すところで、未だアインズ様に楯突く不敬な輩どもが多くおります。クアゴアを支配下とする時と同じ様な事を言っておりますが、脆弱な存在にありながら、支配下に置きたくば力を示せ」などと妄言を宣っております。こちらで選定し、一定数まで削除致しますでしょうか？」

「うむ……。それが一番簡単ではあるが……。」

(力を示せねえ……。正直ハムスケとトロールとあのナーガが三すくみになっていた位には弱い部族だろ？ 更には3匹ともナザリックの支配下になったか殺されたが、その情報を集める知能も持たない訳だ。支配下に置くメリットも感じないな。皆殺しでいいんだけれど。)

「我がナザリックの力を知りたくば、カルネ村を襲えとでも伝えておけ。ナザリックが持つ最弱の村であるともな。」

「畏まりました！アインズ様！」



「……それにしても、何だったのかしら？」

トブの大森林から突然現れた亜人の軍勢。長弓兵団と魔法砲撃隊だけでカタが付き、どちらかといえど山火事の対処に苦慮したほどだ。村は戦闘態勢に入り、第二波を警戒していたが、それ以上追撃される様子も無いので、村は厳戒態勢を——もちろん最低限の見張りは立てるが——崩す。

エンリが知る限り、トブの大森林から亜人や魔獣といったモンスターが攻め込んできた経験はカルネ村に無い。

「やっぱ族長はスゲエや！あれは凶暴で知られる部族なんだ、おいらの仲間達も何人喰われたか！」

「うーん。交渉出来れば一番良かったんだけど……、とりあえず悪い部族だったみたいだし、今回は仕方ないかなあ。今度は手加減が大事ね。」

その後トブの大森林側にも物見櫓が設置され、薬草採取の際は厳重な警護が付いたのだが、門が開くこともなく、軍勢が殲滅されたと噂になり、トブの大森林からカルネ村を襲う愚者は二度と現れなかった。